

42521

教科書文庫

4
815
44-1938
20000 25695

1938

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

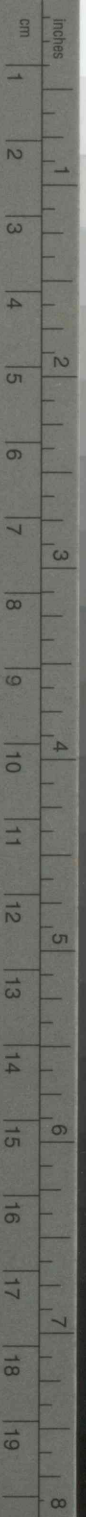


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Hal9
資料室

改新文典

實業學校用



文部省檢定
實用國語教科用

資料室

375.9
Haig

東京帝國大學教授
文學博士 橋本進吉著

改新文典

實業學校用

東京 富山房發兌



例言

- 一 本書は昭和十二年三月改正の實業學校教授要目に準據し、實業學校に於ける國文法教科書として編じたものであります。
- 一 本書は國文法の全般に亘つて、その概要を授けるのを目的としたものであります。中にも、各品詞の特質と語の活用と文の構成とについて明確な知識を與へるのを主眼としました。
- 一 第一篇に於ては、國語文法・口語文語の差異等について大體の概念を與へた外に品詞分類の基礎として必要な事項を説きました。これによつて、從來よりも一層明かに各品詞を識別する事が出來ようと思ひます。
- 一 第四篇では、品詞の轉成を説くと共に、語の構成の條に於ても品詞との關係に注意し、品詞の知識を徹底させるやうにしました。
- 一 活用の知識を明確にする爲に、助動詞及び助詞の條に於ても、用言との接續について注意をしました。

一 文の成分に關する諸章に於て、各成分に如何なる語が用ひられるかを述べて、品詞と文章論との聯關を明かにしました。

一 本書の著者は、現時の國語教育の實際と社會の情勢とに鑑み、中等學校ではじめて課する國語文法は、口語文法を基礎として文語文法に進むのが最自然で最効果の多い方法であると信じ、まづ口語について各詞と活用とを説いて文法の知識の概要を授け、次に口語と對照しつつ文語の品詞と活用とを説く事にしました。但し、文の構造及び種類に關しては、口語と文語とを分離せず、口語を基礎として文語を併せ説く事にしました。

一 例文はなるべく平易で既知のものを選びました。

昭和十二年十月

著者識す

改制
新文典
實業學校用

目次

第一篇	總說	一
第一章	國語と文法	一
第二章	文と單語	三
第三章	主語 述語 修飾語	七
第四章	品詞概説(一)	九
第五章	品詞概説(二)	二二
第二篇	口語の品詞	二六
第六章	名詞	二六

第七章	代名詞	一八
第八章	動詞の活用	二〇
第九章	動詞の活用の種類(一)	二三
第十章	動詞の活用の種類(二)	三〇
第十一章	形容詞の活用と形容動詞	三四
第十二章	用言の音便形	三九
第十三章	副詞	四二
第十四章	接續詞	四四
第十五章	感動詞	四六
第十六章	助動詞の種類及び活用(一)	四九
第十七章	助動詞の種類及び活用(二)	五五
第十八章	助詞	六〇

第三篇 文語の品詞

第十九章	代名詞と接續詞	六六
第二十章	文語動詞の活用の種類(一)	七一
第二十一章	文語動詞の活用の種類(二)	七六
第二十二章	文語動詞の活用の種類(三)	七九
第二十三章	文語形容詞の活用と形容動詞	八四
第二十四章	文語用言の音便形	八九
第二十五章	文語助動詞の種類と活用(一)	九二
第二十六章	文語助動詞の種類と活用(二)	九六
第二十七章	文語助動詞の種類と活用(三)	一〇三
第二十八章	文語の助詞	一〇七
第四篇	品詞の轉成と語の構成	一一七

第二十九章	品詞の轉成	一七
第三十章	複合語	一三〇
第三十一章	接頭語接尾語	一三六
第五篇 文	一三〇
第三十二章	文の成分(一)	一三〇
第三十三章	文の成分(二)	一三三
第三十四章	文の成分(三)	一四〇
第三十五章	文の成分(四)	一五〇
第三十六章	文の成分の位置と省略	一五四
第三十七章	文の構造と節	一五九
第三十八章	文の種類	一六七

附 表

第一表	五十音圖
第二表	動詞活用表
第三表	形容詞活用表
	形容動詞活用表
第四表	助動詞活用表
第五表	口語助動詞接續表
	文語助動詞接續表
第六表	口語助詞接續表
	文語助詞接續表

目 次 終



改制
新文典
實業學校用

橋本進吉著

第一篇 總說

第一章 國語と文法

日本語	口語	文語
-----	----	----

(一) 言語は國によつて違つてゐる。我々日本人の用ひる言語は日本語である。我々は之を國語といふ。

(二) 日本語には、談話に用ひる言語と、文字で書く時に用ひる特別の言語とがある。談話に用ひる言語を口語と云ひ、文字で書く時に用ひる特別の言語を文語といふ。

(三) 我々は言語によつて、思ふ事を他人に通じるが、言語は、それぞれさまつた意味をもつてゐる。一つ一つの言葉によつて、組

文 法

立てられるものである。その組立て方には、一定の法則がある。その法則をはづれては、全く意味を成さないか、又は思ふ事を正しく傳へる事が出来ない。その法則を文法といふ。
〔四〕 口語と文語とは、その文法が違つてゐる。勿論一致する所も多いが、違つた所も少くない。

練習題 一

A 次の各段から順々に一つづつ語をとり、それをつゞけて、ことばになるかならぬかを見よ。

鯉が	池の	中を	多い	およぐ
鯉を	池を	中の	ゆるく	およげ
鯉の	池に	中で	駄を	たべる

B 次の語を、いろくゝの順序につゞけて、その意味の違ひを見よ。

飛行機が	空を	飛んでゐる
------	----	-------

C 次の文を口語に直し、文語と口語との差異を考へよ。

- 一 春は花咲き、秋は木の葉落つ。
- 二 御殿の御庭には、下葉の色づきたる萩茂れり。
- 三 萩の御茶屋といふ名のあるも之がためなるべし。
- 四 花は盛りや、過ぎて、既に散りたるもあり
- 五 綿毛に包まれたるひよこども、小さき聲を立てつゝ、かけめぐる。
- 六 忙しき時に手の足らずといふは、働く人の少きをいふなり。

第二章 文と單語

〔五〕 一つの纏まつた思想を云ひ表はす一つづきの言葉を文といふ。文の終では必ずことばが切れる。文字で書く時は、を附ける。

文

單語、語

春が來た。一寸いらつしやい。
あなたの御宅はどちらですか。
これ等は、皆文である。

〔六〕 一つ一つの思想を表はす言葉を單語又は語といふ。文は單語から成立つてゐる。

一つの文を組立ててゐる幾つかの單語は、互に意味上關係があり、すべてが合して、一つの纏まつた思想を表はすものである。

〔七〕

宮島橋立松島を日本三景といふ。

學校の庭にきれいな花がたくさん咲きました。

右の文の「及び」を附けたものは皆單語で、それ／＼意味をもつてゐる。その中を「と」に「が」ましたは、いつも他の語に附屬し、これと共に用ひられるもので、決してそれだけ切り離し

獨立する語
附屬する語

て用ひる事はない。宮島橋立松島日本三景いふ學校庭きれいな花たくさん咲きは、他の語に附屬せず、それだけ獨立して用ひる事が出来るものである。かやうに、單語には、獨立する語と、常に他の語に附屬する語とがある。

〔八〕

君も行き、僕も行く。

君は行け。僕は行かない。

右の例のやうに、「行く」といふ語は、ことばの切れる場合やつゞく場合、いろ／＼の他の語につゞく場合などによつて、「行き」「行く」「行か」など、語の終の部分變化する。

匂もよく、味もよい。

天氣さへよければ、行きませう。

右のよくよいよけれも、「よい」といふ語の變化した形である。かやうに、いろ／＼の場合に應じて語の形の變化する事を活

活用

活用のある語
活用のない語

用といふ。「君」「僕」「味」「天氣」「も」「は」「さへ」「ば」などには、かやうな變化はない。かやうに、單語には、活用のある語と、活用のない語とがある。

練習題 二

次の文の單語に活用があるか無いかを述べよ。

- 一 馬 は 大そう 元氣 の よい 動物 で あり ます。
- 二 鳥 は ふくろふ を 見 る と、 太い くちばし で つゝ きます。
- 三 島 の 人 は 「日 は 海 から 出 て 海 へ はいる もの だ」と 申し ます。
- 四 今 年 の 春、 二匹 の 山 羊 が 生 ま れ ま し た
が、 もう 乳 を 飲 み ま せ ぬ。
- 五 大 蛇 は 酒 桶 を 見 つ け、 八 つ の 頭 を 八 つ の 桶 に 入 れ て、 が ぶ が ぶ と 飲 み ま し た。

述語
主語

第三章 主語 述語 修飾語

〔九〕

鳥が飛ぶ。 水は冷い。
僕は學生だ。

右の文に於て、「飛ぶ」「冷い」「學生だ」は、鳥が「どうするか」「水が」どんなであるか、「僕が」「何であるか」を述べるもので、之を述語といふ。「鳥が」「水は」「僕は」は、「何が飛ぶか」「何が冷いか」「何が學生であるか」を示すもので、之を主語といふ。すべて、文の中で、「何がどうする」「何がどんなだ」「何が何だ」といふ關係にある語の中、「何が」に當るものを主語と云ひ、「どうする」「どんなだ」「何だ」を示すものを述語といふ。

〔10〕 白い花が見事に咲いた。

右の文において、「白い」は「花」に附いて、その花がどんな花であるかを定め、「見事に」は「咲いた」に附いて、その咲きやうがどんなで

修飾する
修飾語
被修飾語

あるかを定める。かやうに、他の語に附いて、その意味をくはしく定める事を修飾するといふ。「白い」「見事に」「花」「咲いた」を修飾する語である。之を修飾語といふ。また修飾語によつて修飾せられた語を被修飾語といふ。右の文の「花」「咲いた」は被修飾語である。

練習題 三

A 次の文から主語と述語とを見出せ。

- 一 佐藤君も登山する。
- 二 あそこはあぶない。
- 三 それは地理書です。
- 四 弟が泣いて居る。
- 五 われわれは日本人だ。
- 六 鶏が鳴きましたか。

七 運動場は暖かです。

八 どなたかいらつしやいました。

B 次の文の中の修飾語と被修飾語とを挙げよ。

- 一 立派な建物が見える。
- 二 小さい鳥はかはい。
- 三 自動車は静かに動き出した。
- 四 涼しい風がそよ／＼と吹く。
- 五 昨日からの雨はすっかりやみました。
- 六 近所の子供等が嬉しさうに遊んでゐる。
- 七 こちらの高い山は常陸の筑波山です。

第四章 品詞概説(一)

(二) 單語を文法上の性質の違ひによつて、幾つかに分け、その一

品詞

つ一つを品詞と呼ぶ。本書では、次の九品詞に分ける。

名詞 代名詞 動詞 形容詞 副詞

接續詞 感動詞 助動詞 助詞

〔三〕 (甲) 花 建物 東京 西郷隆盛

(乙) 私 これ そこ あちら

名詞
代名詞

(甲)の諸語は、事物の名や地名・人名を表はす語である。之を名詞といふ。(乙)の諸語は、事物の名をいふ代りに、それ等を直接に指していふ語である。之を代名詞といふ。

名詞・代名詞は、主語となることの出来るものである。之を總稱して體言といふ。體言には活用が無い。

〔三〕 (甲) 螢が飛ぶ。 蛇が居る。

(乙) 鐵は堅い。 これは美しい。

(甲)の「飛ぶ」「居る」は、事物の動作存在を述べる(敘述する)語である。

體言
體言は主語となる。體言には活用がない。

動詞
形容詞

かやうなものを動詞といふ。(乙)の「堅い」「美しい」は、事物の性質・有様を述べる(敘述する)語である。かやうな語を形容詞といふ。

動詞・形容詞は、それだけで述語となることの出来るものである。之を總稱して用言といふ。用言には活用がある。

用言
用言は述語となる。用言には活用がある。

練習題 四

次の文の傍線を附けた語の品詞をいへ。

一 燕の飛ぶのは、矢よりも早い。

二 あそこに形の面白い島が見える。

三 お前の國はどこか。又親の名は何といふ。

四 私は今日から日記をつける約束をした。

五 それはどなたの帽子ですか。すゝぶんだきいのですね。

六 若い男がわざと手から斧を放すと、斧はどぶんと池へ落ちま

した。
七 兄は、負けてもよいからしまひまで走れと申しました。

第五章 品詞概説(二)

〔四〕 山の頂上が、はつきり見える。

今朝も、かなり寒い。

右の「はつきり」かなり「は、下」の「見える」「寒い」を修飾する語である。このやうに、動詞・形容詞を修飾する語を副詞といふ。副詞は主語になることは無い。

〔五〕 あれは海だらうか、それとも川だらうか。

それは僕も讀んだ。併し面白い本ではない。

右の「それとも」併し「のやうに、前のことばの意味を受けて後のことばに續ける語を接續詞といふ。接續詞は、主語にも述語

副詞
副詞は主語にな
ることが無い。

接續詞

にも修飾語にもならない。

〔六〕 あゝ、こまつた事だ。

はい、さうです。

右の「あゝ」「はい」のやうに、感動の情を表はす語や、應答の語を、感動詞といふ。感動詞は、それだけで言ひきりになる事が出来る語である。主語にも述語にも修飾語にもならない。

〔七〕 (甲) 出る杭は打たれる。昨日雷が落ちた。

(乙) これは日本の地圖だ。

(甲)の「打たれる」の「れる」は「打つ」といふ動詞に附いて、杭が「打つ」といふ動作を受ける事を表はし、「落ちた」の「た」は「落ちる」といふ動詞に附いて「落ちる」といふ作用が、今より前に起つた事を示す。(乙)の「地圖だ」の「だ」は、地圖といふ名詞に附いて、何であるかを述べ説明して、之を述語とする。かやうに、動詞に付き、之にいろ

接續詞は主語、
述語、修飾語い
づれにもならな
い。

感動詞
感動詞は言ひき
りになる。主語、
述語、修飾語い
づれにもならな
い。

助動詞
助動詞には活用がある。

助詞
助詞には活用が無い。

助詞、助動詞は
附屬する語である。

いろの意味を加へて、敘述を助け、又は他の語に附いて、之に敘述する意味を加へる語を助動詞といふ。助動詞には活用がある。

〔一八〕

(甲) 庭の菊も、白い花びらに赤みがさして來た。

(乙) 源氏の者どもは、義經をかばひました。

(甲)の「の」も「に」が「て」、(乙)の「は」を「の」やうに、他の語に附いて、その語と他の語との關係を示し、又は之に或意味を添へる語を助動詞といふ。助動詞には活用が無い。

助詞と助動詞とは、いつも他の語に附いて現はれるもので、決して單獨には用ひられない。即ち附屬する語である。その他の品詞は、すべて獨立する語である。

練習題 五

A 次の文の傍線を附けた語の品詞をいへ。

一 私はなるたけ道のよいところを歩きました。

二 まあ、あなたはどなたですか。

三 彈丸はをり／＼足下に落ちる。けれども將軍は少しも驚く色がない。

四 やあ、また月が隠れた。もう戸をしめよう。

五 途中で雨に降りましたが、しかしちぎやみしましたので、あまり濡れません。

B 次の文の一つ一つの單語の品詞をいへ。

一 さあ、出かけよう。後れると困るから急がう。

二 螢來い。あつちの水はにがいぞ。こつちの水はあまいぞ。

三 兎はすぐ海の水をあびました。すると痛みが一そうひどくなりました。

四 弟は病氣で、昨日も御飯を食べない。

五 美しい緑の葉は、さら／＼と音を立ててゐます。

第二篇 口語の品詞

第六章 名詞

名詞

〔一九〕名詞は、事物の名を表はす語をいふ。

源頼朝 西郷隆盛 東郷元帥 ワシントン

東京市 長野縣 鎌倉

富士山 信濃川 琵琶湖

犬 孔雀 梅 菊 金剛石 机 家 機械 ペン

心 勇氣 正直 衛生 時間 忍耐 勉強

これ等はすべて名詞である。

○名詞は體言の一種である。即ち活用が無く、主語になる事が出来る。

〔二〇〕名詞のうち、數を表はす語や、數によつて順序を表はす語を、特に數詞といふことがある。

數詞

ひとつ 二箇 三人 四羽 五ダース

いくつ いく人

第一 二號 三つめ (午前)四時

練習語 六

次の文から名詞をぬき出せ。

一 五時に起きて外に出ると、呉服屋の小僧が表を掃いてゐた。

二 島を出て六日ばかりたつと、陸のかげはちつとも見えない。

三 コロンブスは上陸すると、喜んで土地の上に坐つた。涙が頬を傳はつて流れた。

四 昨日までに米俵の山が二つ出来て、もう三つ目の山が出来かかつてゐます。

五 平維盛は十萬騎を引きつれて、越中の國の礪波山に陣を取りました。

代名詞

第七章 代名詞

〔三〕 代名詞は、事物の名をいふ代りに、それ等を直接に指していふ語である。

○代名詞は體言の一種である。即ち活用が無く、主語になる事が出来る。

〔三〕 代名詞のうち、人を指していふ語を人代名詞といひ、人以外の事物場處、方角を指していふ語を指示代名詞といふ。人代名詞の主なものは、次の通りである。

人代名詞

指示代名詞

わたくし	あなた	このかた	そのかた	あのかた	どのかた
わたし	おまへ				どなた
僕	君				だれ

指示代名詞は次の通りである。

事物	これ	それ	あれ	など	これ
----	----	----	----	----	----

場處	こ	そ	あ	ど
方角	こ	そ	あ	ど
	こ	こ	こ	こ
	ち	ち	ち	ち
	ら	ら	ら	ら
	ち	ち	ち	ち
	ら	ら	ら	ら

練習題 七

次の文から代名詞をぬき出し、かつその種類をいへ。

- 一 あつちを見ても、こつちを見ても、どつちへ向いても、山ばかりでした。
- 二 そこにこのかたのステッキがありませんか。
- 三 「だれだい、今笑つたのは。」私です。 蟻です。」
- 四 君、ちよつと待つて下さい。 僕も今そこへ行きます。
- 五 これもいけない、それもいけないとすれば、何がいゝだらう。
- 六 ここがあなたの教室です。 席はあれにきめます。
- 七 あなたはどなたでいらつしやいますか。

第八章 動詞の活用

動詞

〔三〕動詞は事物の動作や存在を述べる語である。

行く。歸る。飛ぶ。取る。立つ。建てる。読む。

書く。勉強する。思ふ。知る。心配する。

有る。居る。居る。

これ等は皆動詞である。

○動詞は用言の一種である。即ち活用があり、それだけで述語となる事が出来る。

口語動詞の活用

〔四〕動詞には活用がある。即ち動詞は、用ひ方によつて、その形が變る。今「読む」について見れば、次の通りである。

- (一) 本を讀まない。
- (二) 本を讀みます。
- (三) 本を讀む。

語幹

語尾

口語動詞の活用形

未然形

連用形

終止形

- (四) 本を讀む人。
- (五) 本を讀めば物しりになれる。
- (六) 早く本を讀め。

右の「讀」のやうに、變化せぬ部分を語幹といひ、「ま」「み」「む」「め」のやうに、變化する部分を語尾といふ。

〔五〕未然形 前項の例(一)の「讀ま」は、打消の意味の「ない」に連る形である。これはまた「ぬ」「う」(動詞によつては「よう」など)にも連つて、動作がまださうなつてゐない意を表はす。之を未然形といふ。

連用形 (二)の「讀み」は、「ます」に連る形である。これはまた「讀み出す」「讀みかける」など、他の用言に連る時にも用ひる形である。之を連用形といふ。

終止形 (三)の「讀む」は、言ひ切る時に用ひる形である。之

連體形

假定形

命令形

を終止形といふ。 終止形は、用言の本體である。

連體形 (四)の「讀む」は、體言に連る形である。 之を連體形といふ。

假定形 (五)の「讀め」は、「ば」に連つて、假定を表はす時に用ひる形である。 之を假定形といふ。

命令形 (六)の「讀め」は、命令に用ひる形である。 之を命令形といふ。

以上の未然形・連用形・終止形・連體形・假定形・命令形のおののを活用形といふ。

練習題 八

A 傍線を附けた動詞を、語幹、語尾にわけよ。

一 明日から學校が始まります。 また一緒に行きませう。

二 僕が「福は内、鬼は外」と叫びながら豆をまくと、妹と弟がそれを

拾ひました。

三 龜は少しも休まないで走りまわしたので、終に兎に勝ちました。

B 次の各動詞のすべての活用形を考へて見よ。

書く 押す 漕ぐ 打つ 死ぬ 問ふ 飛ぶ 積む 取る

第九章 動詞の活用の種類(一)

口語動詞の活用の種類

〔二六〕 動詞の活用には五つの違つた種類がある。 即ち、

四段活用 上一段活用 下一段活用

カ行變格活用 サ行變格活用

〔二七〕 四段活用 「書く」といふ動詞の各活用形は

細字は書かない。 (未然形)

細字を書きます。 (連用形)

細字を書く。 (終止形)

四段活用

細字を書く人。 (連體形)
 細字を書けば目がつかれる。 (假定形)
 時々細字も書け。 (命令形)

即ち語尾が かきくくけけ となつて、五十音圖の アイウエ の四つの段にわたる。このやうな活用を **四段活用** といふ。

○四段活用の動詞は、カガサタナハバマラの各行にある。

行	か	が	さ	た	な
語幹 / 語尾	書 ^か	漕 ^が	押 ^お	打 ^う	死 ^し
未然	か	が	さ	た	な
連用	き	ぎ	し	ち	に
終止	く	ぐ	す	つ	ぬ
連體	く	ぐ	す	つ	ぬ
假定	け	げ	せ	て	ね
命令	け	げ	せ	て	ね

〔三六〕 上一段活用

「起きる」といふ動詞の各活用形は

は	ば	ま	ら
買 ^か	呼 ^よ	踏 ^ふ	降 ^ふ
は	ば	ま	ら
ひ	び	み	り
ふ	ぶ	む	る
ふ	ぶ	む	る
へ	べ	め	れ
へ	べ	め	れ

弟はまだ起きない。 (未然形)

六時には起きます。 (連用形)

毎朝六時に起きる。 (終止形)

起きる時。 (連體形)

五時に起きればよからう。 (假定形)

遅くとも七時には起きよ(起きろ)。 (命令形)

即ち語尾は きききるきるきれきよ(きろ) となり、五十音圖の イ

上一段活用

の段の音と、それに「れよろ」の附いたものとしてある。このやうな活用を上一段活用といふ。

○上一段活用の動詞は、カガザタダナハバマヤラウの各行にある。

行	か	が	ざ	た	だ	な	は	ば
語幹	起 ^お	過 ^す	案 ^{あん}	落 ^お	恥 ^は	(似)	強 ^し	綻 ^{ほころ}
語尾								
未然	き	ぎ	じ	ち	ち	に	ひ	び
連用	き	ぎ	じ	ち	ち	に	ひ	び
終止	きる	ぎる	じる	ちる	ちる	にる	ひる	びる
連體	きる	ぎる	じる	ちる	ちる	にる	ひる	びる
假定	きれ	ぎれ	じれ	ちれ	ちれ	にれ	ひれ	びれ
命令	きよ	ぎよ	じよ	ちよ	ちよ	によ	ひよ	びよ

ま	や	ら	わ
(見)	悔 ^く	懲 ^ち	(居)
み	い	り	ゐ
み	い	り	ゐ
みる	いる	りる	ゐる
みる	いる	りる	ゐる
みれ	いれ	りれ	ゐれ
みよ	いよ	りよ	ゐよ

○動詞の中には、語幹語尾の區別のつかぬものがある。表の語幹の例に()を附けたのはそれである。以下の表もこれにならふ。

○ヤ行上一段活用の動詞は、「射る」「歸る」「報いる」「悔いる」「老いる」などである。ワ行上一段の動詞は「居る」「率^{ひら}ゐる」などである。

【五】 下一段活用 「考へる」といふ動詞の各活用形は

- まだ何も考へない。 (未然形)
- 私もよく考へます。 (連用形)
- つくづくと考へる。 (終止形)
- 何かを考へる時。 (連體形)

下一段活用

考へればわかることだ。(假定形)
落ちついて考へよ(考へろ)。(命令形)

即ち語尾は、へ・へる・へる・へれ・へよ(へろ)となり、五十音圖のエの段の音と、それにる・れ・よ(ろ)の附いたものとである。このやうな活用を下一段活用といふ。

○下一段活用の動詞は、五十音圖の各行とガサダバの各行とにある。

た	ざ	さ	が	か	あ	行
捨	混	寄	投	受	(得)	語幹 / 語尾
て	せ	せ	げ	け	え	未然
て	せ	せ	げ	け	え	連用
てる	せる	せる	げる	ける	える	終止
てる	せる	せる	げる	ける	える	連體
てれ	せれ	せれ	げれ	けれ	えれ	假定
てろよ	せろよ	せろよ	げろよ	けろよ	えろよ	命令

わ	ら	や	ま	ば	は	な	だ
植	流	越	攻	浮	考	尋	撫
ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で
ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で
ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる
ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる
ゑれ	れれ	えれ	めれ	べれ	へれ	ねれ	でれ
ゑろよ	れろよ	えろよ	めろよ	べろよ	へろよ	ねろよ	でろよ

○ア行下一段活用の動詞は得る(心得る)だけである。

○ワ行下一段活用の動詞は「植ゑる」「餓ゑる」「据ゑる」などである。

練習題 九

次の動詞の活用の種類をいへ。

働く

勝つ

養ふ

延びる

述べる

老いる	祈る	盡きる	争ふ	返す
負ける	植ゑる	住む	有る	似る
居る <small>ゐ</small>	飲む	居る <small>ゐ</small>	喜ぶ	數へる
聞える	聞く	見る	見える	見せる

第十章 動詞の活用の種類(二)

【三】カ行變格 「來る」といふ動詞の活用形は

まだ誰もこない。(未然形)
 今日けふの會には井上もきます。(連用形)
 佐藤もくる。(終止形)
 此處へくる時。(連體形)
 此處へくればよいのに。(假定形)
 此處へこい。(命令形)

カ行變格活用

右の「來る」の活用をカ行變格活用(略稱カ變)といふ。

未 然	連 用	終 止	連 體	假 定	命 令
こ	き	くる	くる	くれ	こい

○カ變に屬する動詞は「來る」だけである。

【三】サ行變格 「爲る」といふ動詞の各活用形は

何もしない(せぬ)。(未然形)
 何でもします。(連用形)
 僕もさうする。(終止形)
 何かをする時。(連體形)
 さうすればよい。(假定形)
 早くしろ(せよ)。(命令形)

右の「する」の活用をサ行變格活用(略稱サ變)といふ。

サ行變格活用

未 然	連 用	終 止	連 體	假 定	命 令
せし	し	する	する	すれ	せし よる

○サ變に屬する動詞は「する」だけであるが、漢語や外國語を動詞にするには、この活用にすることが多い。その際ザ行になるものもある。

勉強する 運動する キャッチする スケッチする
命ずる 信ずる

○「重んずる」「輕んずる」等は、サ變に用ひるのが普通であるが、又、上一段活用にも用ひる。

練習題 一〇

A 次の動詞の活用の種類をいへ。

旅行する 安んずる 案じる
感ずる 譯す 重んじる
パスする 略す

B 傍線を附けた動詞の活用の種類をいへ。

- 一 青空高くそびえ立ち、からだに雪の着物着て、霞の裾を遠く引く、富士は日本一の山。
- 二 屋島の合戦に、義經は小わきにはさんで、た弓を海へ落しました。弓は潮に引かれて流れて行きます。義經は馬の上にあつぶしになつて、鞭の先でそれをかきよせようとします。
- 三 正成は何時の間に用意して置いたか、松明を出して、之に火をつけて、橋の上に投げさせた。
- 四 弱い者をいぢめるのは、男らしくないと思ひます。
- 五 燕は田や畠の作物につく蟲を取つてたべますから、人の役に立つ鳥です。

C 次の文に誤があつたら正せ。

- 一 絶へず努力している様だが、さつぱり成績があがらない。
- 二 目を閉じて、この詩を讀んで御覽なさい。

形容詞

- 三 考えて見ると、今強いて行くには及ばない。
- 四 たくさんの苗を植えたが、育つたのは数える程しかありません。
- 五 いや／＼大恩に報ひる時が来た。

第十一章 形容詞の活用と形容動詞

〔三〕 形容詞は事物の性質有様を述べる語である。

高い。堅い。早い。新しい。涼しい。
面白い。小さい。長い。軽い。

これ等は形容詞である。

○形容詞は用言の一種である。即ち活用があり、それだけで述語となる事が出来る。

〔三〕 形容詞は、次のやうに活用する。

形容詞の活用

(一) 道がだん／＼高くなる。 門が新しく見える。

(二) あの山はよほど高い。 これは新しい。

(三) 高い山に登る。 新しい帽子を買ふ。

(四) あまり高ければ登れまい。 新しければ買はう。

右の「たか」「高」「あたらし」「新」のやうに變化せぬ部分を語幹といひ、「く」「し」「けれ」のやうに變化する部分を語尾といふ。

〔三〕 連用形 前項の例(一)の「高く」「新しく」は「高くなる」「新しく見える」など、他の用言に連る時に用ひる形である。之を連用形といふ。

終止形 (二)の「高い」「新しい」は言ひ切る時に用ひる形である。之を終止形といふ。

連體形 (三)の「高い」「新しい」は、體言に連る時に用ひる形である。之を連體形といふ。

語幹

語尾

形容詞の活用形

連用形

終止形

連體形

假定形

假定形 (四)の「高けれ」「新しけれ」は、「ば」に連つて、假定を表はす時に用ひる形である。之を假定形といふ。
連用形終止形連體形假定形のおのくを活用形といふ。

	語幹	語尾	
高 <small>たか</small>			未然
新 <small>あたら</small> し			連用
			終止
			連體
			假定
			命令

○形容詞の活用形には、未然形と命令形とがない。

○形容詞の活用は一種である。しかし場合によつては、「新しい」のやうに、語幹の末に「し」のあるのをシク活用といひ、「高い」のやうに「し」のないのをク活用と稱して、二種とする事もある。

〔言〕形容詞と同じ性質の語で、次の様に活用するものがある。
之を形容動詞といひ、特別な形容詞と見る。

形容動詞

シク活用
ク活用

種二第	種一第	語幹	語尾	
立 <small>た</small> 派 <small>は</small>	静 <small>しず</small> か	暑 <small>あつ</small> 嬉 <small>うれ</small> し		未然
				連用
				終止
				連體
				假定
				命令

未然形は助動詞「う」に連る形である。

暑あつ嬉うれしからう。 静しずかた立た派はだらう。

連用形は助動詞「た」に連る形である。

暑あつ嬉うれしかつた。 静しずかた立た派はだつた。

假定形は助詞「ば」に連つて假定の意を表はす形である。但

し、この「ば」は無いこともある。

庭にわが静しずかならば行いつて見みよう。

態度たいどさへ立た派はならば非ひ難じはおこるまい。

第二種の形容動詞は、丁寧^ニに言ふ場合には次のやうに活用する。

立派 静か	語幹	語尾
	未然	連用
でせ(ウ)	でし(タ)	終止
です		連體
		假定
		命令

練習題 一一

次の文から形容詞・形容動詞をぬき出し、その種類をいへ。

- 一 波が穏かならば(ば)船で行つてもいい。
- 二 そんなに風が強くては、ずるぶん心細かつたでせう。
- 三 今朝は大そう寒い。屋根の上は霜でまつ白だ。
- 四 話があまりくだいので、いやでした。
- 五 こんなに閑静な所で暮したら、さびしく思ふ事もあるだらう。
- 六 社長は有名だつた人だけに、生活も大變はででした。

動詞の音便形

- 七 自分さへ正しければ、一時悪く思はれても、やがて潔白な事がわかるだらう。
- 八 そんなに面白ければ、見物人も多いでせう。
- 九 それは弓が惜しかつたのではない。この弱い弓を取られては源氏の名折れになるからだ。

第十二章 用言の音便形

〔三〕 動詞から「て」「た」に連る場合には、連用形から連るのであるが、サ行以外の四段活用は、普通の活用形とは違つた形から連る。これを動詞の音便形といふ。動詞の音便形には、語尾がイとなるもの、ウとなるもの、ンとなるもの、促音となるものの四種がある。

○音便が起ると、右の「て」「た」は、「で」「だ」と變ることがある。また「たら」「たり」の場

合もたと同様である。

一、語尾がイになるもの(イ音便) カ行四段ガ行四段ガ
行の時は「て」「た」は「で」「だ」となる。

聞いて(た) カ行
騒いで(だ) ガ行

二、語尾がウになるもの(ウ音便) ハ行四段。

沿うて(た) 祝うて(た)

三、語尾がンになるもの(撥音便) ナ行四段、バ行四段、マ
行四段(「て」「た」が「で」「だ」となる)。

死んで(だ) ナ行
飛んで(だ) バ行
踏んで(だ) マ行

四、語尾が促音になるもの(促音便) タ行四段、ハ行四段、

イ音便

ウ音便

撥音便

促音便

ラ行四段。

打つて(た) タ行
買つて(た) ハ行
張つて(た) ラ行

○ハ行四段は促音にもなり、又ウにもなるのである。

〔毛〕形容詞の連用形が、「ござり(い)ます」「存じます」に連る時は、その語尾の「く」が「う」となる。之を形容詞のウ音便形といふ。

お早うございます。 嬉しう存じます。

練習題 一一二

A 次の文から音便形をぬき出し、かつ何行の活用であるかをいへ。

- 一 勇んで進め。進んだら退くな。
- 二 大國主命が出雲の海岸を歩いていらつしやると、波の上にか小さい物が浮んでこつちへ近寄つて來ました。

形容詞のウ音便形

- 三 おたまじやくしが、長い尾をふつて、元氣よく泳いでゐます。
- 四 伯父さんに時計を買つていただいて、ようございましたね。
- 五 矢はあたつて居ませんのに、狐は死んで居ます。

B 次の文に誤があつたら正せ。

- 一 朝日がばつとガラス戸に輝かがやひた。
- 二 七度轉まむで八度起きる元氣が必要です。
- 三 道に迷ふて反對の方向に進むで居た。
- 四 有りがとふございます。この御恩は死むでも忘れません。
- 五 お恥しゆうございますが、これが私の描かひた繪です。
- 六 流れに沿ふて下ると、右に高い山がそびへている。
- 七 いくら上手に歌ふても、耳を傾けて聞ひてくれる者がなかつた。

第十三章 副詞

副詞

〔三〕 副詞は、動詞や形容詞を修飾する語である。文章をこまかに見る。外は大層寒い。肉はごく柔かだ(柔かです)。

右の「こまかに」「大層」「ごく」等は副詞である。

○副詞には活用がなく、又主語になる事がない。

〔五〕 副詞は、また他の副詞を修飾することがある。

もつとゆつくり歩け。
よほどはつきり見える。
すこし穩かになつた。
大變親切に世話する。

〔四〕 副詞と修飾される語との間に、他の語が入ることがある。
小石がころくくと谷底にころがる。
やはりこちらがよい。

多分弟も参りませう。

○副詞には語の終りに「に」「と」のついたものが多い。

静かに	確かに	こまかに	柔かに	たひらに
まれに	すなほに	自然に	立派に	急に
ひらりと	するりと	ころ／＼と	ばた／＼と	

○右のやうな「に」で終る副詞の「に」を除いたものを語幹として、第二種の形容動詞が出来る事が多い。(「静かだ」「確かだ」「こまかだ」など)

練習題 一三

次の文から副詞をぬき出し、かつその修飾する語被修飾語を示せ。

- 一 味方は、さん／＼に敵を切りまくつた。
- 二 はるかに退いた敵は、また押寄せて来た。
- 三 印度の國は、たいそう暑うございます。
- 四 あれは、ふだんはごく大人しいが、怒ると非常にこはい人です。
- 五 かなり詳しく見たが、やはり見落しがあつた。

接続詞

第十四章 接続詞

〔四〕 接続詞は、前のことばの意味を受けて、後のことばに續ける語である。

それは僕も讀んだ。しかしあまり面白くなかつた。
 道はかなり遠い。けれども時間は多くかからない。
 藤原は英語も出來、そのうへドイツ語もうまい。

- 六 あんなに丈夫な人が、そんなに弱つたんですか。
- 七 もつとゆつくりと御讀みなさい。
- 八 しと／＼と降る雨の中を、とぼ／＼と歩いて來る人がありま
す。
- 九 右の方にかすかに見えるのは、私の村の灯です。
- 一〇 こんなにひどい雨は、めつたに無いものです。

私は野球も下手だし、また庭球も上手でない。
東京及び大阪は我が國の二大都市である。

○接續詞には活用がなく、主語にも述語にも修飾語にもならない。

練習題 一四

次の文から接續詞をぬき出せ。

- 一 それでも宜しい。だが少し面白くない所があるやうだ。
- 二 雨は降るまいが、でも用意に傘を持って行くがいい。
- 三 夜中にふと目がさめた。すると枕もとに蟲の音がある。
- 四 徳育知育並びに體育は常に並行しなければならぬ。
- 五 午後の會には私も出席します。尤も少し後れるかも知れません。

第十五章 感動詞

感動詞

〔四〕 感動詞は、感動の情を表はす語や、應答に用ひる語である。

あ、さうだつた。

おう、熱い。

おい、待て。

もし、佐藤さん。

はい、わかりました。

え、参ります。

あなたは御存じですか。

い、え。

右の「あ」「おう」「おい」「もし」「はい」「え」「い」「え」等は皆感動詞である。

○感動詞には活用が無い。主語にも述語にも修飾語にもならない。それだけで言ひ切りになる事が出来るが、文の首（はじめ）に来る事が多い。

練習題 一五

次の文から感動詞をぬき出せ。

- 一 あら、お珍しい。佐藤さんですか。
- 二 え、残念だ。また失敗か。
- 三 おや、また風が吹いて来た。

助動詞

- 四 「さあ、出かけようぢやありませんか。」「はい。」
- 五 いや、これでたくさんです。
- 六 こら、何をするか。そんな事をしてはいかん。
- 七 まわ、かはい、お子さんですこと。
- 八 やあ、皆さん、御苦勞ですな。

第十六章 助動詞の種類及び活用(一)

〔一〕助動詞は、動詞に附いて、その敘述を助け、又は體言その他の語に附いて、敘述する意味を加へるものである。

○助動詞は附屬する語であつて、活用がある。

〔二〕助動詞は又他の助動詞に附いて、幾つも重なることがある。
鉛筆が折れました。
鉛筆は折れませんでした。

助動詞には活用がある。

助動詞の種類

受身の助動詞

〔三〕助動詞には活用がある。その活用のしかたは、動詞と同じもの、形容詞と同じもの(共に或活用形を缺くものがある)、及び特殊なものがある。又、全く語形の變らぬものもある。

〔四〕助動詞は、その表はす意味から、これを次の九種に分ける。

- 受身 可能 使役 打消 過去及び完了
- 推量 希望 敬讓 指定

〔五〕受身の助動詞 れる られる
人に笑はれる。 主人に譽められる。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ

下一段活用
下一段活用

「れる」は動詞四段活用の未然形に「られる」はその他の活用の

可能の助動詞

未然形に附く。「られる」がサ變の動詞に附くと、「せられる」となるが、「いいやうにされる」「噂うわさされる」「侮辱うぶろされる」のやうに、「される」となることもある。

〔六〕可能の助動詞 れる られる

僕も一緒に行かれる。何時でも見られる。

可能の「れる」「られる」の活用のしかた、及び動詞への付き方は、受身の「れる」「られる」と同じである。但し可能のには命令形がない。

使役の助動詞

〔七〕使役の助動詞 せる させる

面白い話を聞かせる。入學試験を受けさせる。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させろ

下二段活用
下二段活用

打消の助動詞

「せる」は動詞四段活用の未然形に「させる」は上一段下一段力變の未然形に附く。サ變にはその未然形「せ」に「させる」が附いて、「せさせる」となるべきであるが、普通「念入りにさせる」「練習させる」のやうに、「させる」といふ。

〔五〕打消の助動詞 ない ぬ(ん)

月はまだ昇らない。この事は誰も知らぬ(ん)。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ない		なく	ない	ない	なけれ	
ぬ		ず	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね	

ク活用
特殊活用

「ない」「ぬ」は、各活用の動詞の未然形に附く。但し、サ變の動詞には、「しない」「せぬ」のやうに、「ない」は「し」「ぬ」は「せ」に限つて附く。

過去及び完了の助動詞

又「ない」「ぬ」は、四段活用の「有る」には附かない。

○「なく」と「ある」と合して一語になつて次のやうに用ひられる。

知らなからう。 知らなかつた。

〔五〕過去及び完了の助動詞 た(た)

昨夜は十時に寝た。 授業は今済んだ。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
た	たら(ウ)		た	た	たら(バ)	

特殊活用

「た」はすべての動詞の連用形に附く。但し、その時に、サ行以外の四段の動詞が音便形となること、及び音便形に附く「た」は「だ」となる場合があることは、すでに述べた。

○「た」の假定形「たら」は、そのままで假定の意味に用ひられる。

練習題

一六

傍線を附けた助動詞の種類をいへ。

- 一 蒔かぬ種は生えぬ。
- 二 私も五時が打つたら歸られるだらう。
- 三 一度にとつとときの聲をあげさせた。
- 四 たとひ金銀で作つた弓でも、御命には代へられませぬ。
- 五 そんな事を言はれては、誰だつてだまつて居られないさ。
- 六 洋服は着なれなかつたので、はじめは困つた。
- 七 薬を飲ませ粥を食へさせると、やがて元氣になつた。
- 八 もらひ泣きをせぬ者は、ありませんでした。
- 九 通有も左の肩を射られたが、少しも屈せずに進んだ。
- 一〇 自ら蒔いた種ならば、自ら刈らねばならぬ。

第十七章 助動詞の種類及び活用(二)

〔五〕推量の助動詞 らしい う よう まい

推量の助動詞

あれは學校らしい。 會場は此處らしい。
 それがよからう。 弟が知つて居ようと思ふ。
 その話は誰も知るまい。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
らしい		らしく	らしい	らしい		
う			う	(う)		
よう			よう	(よう)		
まい			まい	(まい)		

シク活用
變化せず
變化せず
變化せず

「らしい」は「であるやうだ」の意味で體言に付き、之に敘述の意味を加へる。これは又「佐藤も休むらしい」「問題はやさしいらしい」のやうに、用言にも附く。

○「らしく」が「ございます」「存じます」に連る時は、形容詞と同じく「らしく」となる。

○「らしく」と「ある」と合して一語となつたものは「誰か居るらしく」「たのやうに用ひる。」

「う」は動詞四段活用の未然形に、「よう」はその他の活用の未然形に附く。但しサ變には「し」に附いて、「せ」には附かない。

「まい」は、推量と打消との意をかねた助動詞である。動詞の四段活用には、その終止形に、上一段下一段、カ變には、その未然形に、サ變には、その未然形の「し」に附く、

【喜】 希望の助動詞 たい たがる

私はもううちへ歸りたい。 弟もうちへ歸りたがる。

希望の助動詞

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
たい		たく	たい	たい	たけれ	
たがる	たがら	たがり	たがる	たがる	たがれ	

ク活用
四段活用

敬讓の助動詞

「たい」はすべての動詞の連用形につく。

○「たくが」こざいます「存じます」に連る時は「たう」となる。

○「たく」とある」と合して一語となつたものは、次のやうに用ひられる。

おまへも聞きたからう。 私も見たかつた。

「たがる」はすべての動詞の連用形につき、他が希望する意味に用ひられる。

〔五〕敬讓の助動詞 れる られる ます

先生も時々そんなことを話される。

あのかたは毎朝六時に起きられる。

新聞はこゝにあります。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ まし

特殊活用

指定の助動詞

「れる」「られる」は活用のしかたも、動詞への付き方も、受身の「れる」「られる」と同じである。但し敬讓の助動詞としては、命令形を用ひない。

「ます」は動詞の連用形に附く、但しその命令形「ませ」「まし」は、敬讓の意を含まぬ動詞には附かぬ。

○「ます」の終止形連體形に「まする」を用ひる事がある。

右の外、動詞の「下さる」「なさる」「遊ばす」「申す」「致す」や、「になる」を敬讓の助動詞のやうに用ひる。

あのかたもお出で下さる。(なさる。遊ばす。になる。)

お呼び申す。(致す。)

〔五〕指定の助動詞 だ です

西郷隆盛は英雄だ。 これは私の本です。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
だ	だら(ウ)	だつ(タ)	だ	(な)	なら(バ)	
です	でせ(ウ)	でし(タ)	です			

特殊活用
特殊活用

「だ」「です」は、體言や助詞の「に」に附く。但しその未然形に助動詞「う」の附いたもの及び「なら」は「行くだらう」「白いてせう」「行くなら」「白いなら」のやうに、動詞・形容詞の終止形にも附く。

○「だ」の假定形ならは、そのまゝでも假定の意味に用ひられる。

練習題 一七

A 傍線をつけた助動詞の種類をいへ。

- 一 叔父さんは、これでもよいと言はれた。
- 二 鮭は多く川で死んでしまふらしい。
- 三 虎はどうすることも出来ませんでした。
- 四 あの人ならば、とても承知してくれまい。

- 五 私が身代りに立ちたうございます。
- 六 皆さん、これが目じるしだよ。
- 七 それは弟の本でせう。どうぞその儘にして置いて下さいまし。

B 次の文から助動詞をぬき出し、その種類をいへ。

- 一 あんなに海が荒れたのに、よく平氣で居られたね。
- 二 舟は私どもの家です。ちつともこはい事はありません。
- 三 蟬の代りに蜻蛉を捕らうか。「いや、蜻蛉は益蟲だから、捕らない方がよからう。」
- 四 川で誰か遊んで居るらしい。僕も行きたいな。よし、お母さんに伺つて見よう。
- 五 五時に起されてラヂオ體操に行つたら、僕は三番目だった。
- 六 この頃少し泳がれるやうになつて、嬉しくてたまりません。
- 七 午後叔父さんが魚釣に行かれるので、僕もついて行つた。弟

助詞

- も行きたがつたが、寒いのでやめさせた。
- 次の文に誤があつたら正せ。
- 一 何もしずくに遊んで居やうと考へた。
 - 二 これから大いに勉強せう。
 - 三 齋藤はよもや失敗はせまいと思ふが、どう成ろうかね。
 - 四 人がき(來)ようが、き(來)まいが、平氣で居る。
 - 五 何事をなすにも、意志が強くあらねばならぬ。
 - 六 僕が若し君なれば、そんな事はしないね。
 - 七 あの時に病氣せないと優等生になつたらうが、惜しい事をした。

第十八章 助詞

〔五〕助詞は、他の語に附いて、その語と他の語との關係を示し、或は之に一定の意味を添へる語である。

助詞の種類

第一種

○助詞は附屬する語であつて、活用が無い。

〔五〕助詞の主なものは大體次の通りである。

第一種の助詞 主に體言に附くもの。

- | | | |
|----|----------|-----------|
| が | 鳥が鳴く。 | 私は水が飲みたい。 |
| の | 梅の花。 | 私の讀んだ雑誌。 |
| を | 手紙を書く。 | 行列が門前を通る。 |
| に | 室内に居る。 | 政治家になる。 |
| へ | 東へ向ふ。 | 此處へ來い。 |
| と | 軍人となる。 | 弟と遊ぶ。 |
| から | 門から出る。 | 昨日から始めた。 |
| より | 山より高い。 | 君より早く來た。 |
| で | 汽車で通學する。 | 庭で遊ぶ。 |

第二種

〔五〕第二種の助詞 主に用言及び助動詞に附いて、接續詞の

様なはたらきするもの。

ば 讀めばわかる。

やすければ買はう。

と 讀むとわかる。

やすいと買ふつもりだ。

ても 見てもわかるまい。

をかしくても笑はない。

けれど(も) 止めるけれど(も)やめない。

が 風は吹くが寒くない。つらいが我慢する。

のに よせと言ふのにやめない。

から(の)で 雨が降るから(の)で遠足はやめた。

道が遠いから(の)で骨が折れる。

し 雨も降るし風も吹く。色もいゝし形もいゝ。

て 見て来る。細くて長い。

ながら 歩きながら見る。知りながら教へない。

小さいながらよく働く。

たり 寝たり起きたりぶらぶらしてゐる。

勝つたり負けたりする。

「ば」は用言の假定形に、「て」「でも」は動詞・形容詞の連用形及び動詞の音便形に附く。「ながら」は動詞の連用形・形容詞の終止形に、「たり」は動詞・形容詞の連用形及び動詞の音便形に、「の」は用言の連體形に附く。他は用言の終止形に附く。

「て」「でも」「たり」が音便形に附くと、「て」「でも」「だり」となることがある。

第三種

【五】第三種の助詞 第一種第二種以外の助詞で、いろいろの意味を添へるもの。

は 私は知りません。 鯨は魚ではない。

も 弟も起きた。 桃も櫻も咲いた。

さへ 手にさへ取らない。 行きさへすればいゝのだ。

でも お茶でも飲まうか。 負けてもすると恥しい。
 しか 三つしかない。 さうとしか考へられない。
 まで 此處まで来い。 私にまで手紙を下さつた。
 ばかり 二時間ばかり休んだ。 行先ばかり考へる。
 だけ 私だけが知つてゐる。 見ただけで歸つた。
 なり 君なり僕なり誰か残つて居よう。
 行くなりやめるなり早くきめ給へ。
 か お前も見たいか。 どなたか見えた。
 ぞ そら、いくぞ。 なか／＼つらいぞ。
 ね 相變らずやつて居るね。
 よ 雨がまた降るらしいよ。
 な 受けた恩は忘れるな。 人に言ふな。
 の 燕の飛ぶのは早い。 新しいのがよい。

活用の有無による品詞の分類

〔答〕 品詞は、以上述べたやうに九種ある。之を活用の有無によつて分類すれば、次の通りである。

一、活用のない品詞

名詞 代名詞 (體言)

獨立する語

副詞 接續詞 感動詞

附屬する語

助詞

二、活用のある品詞

動詞 形容詞 (用言)

獨立する語

助動詞

附屬する語

練習題

一八

A 傍線をつけた助詞の種類をいへ。

- 一 フィリップが薬を調合しに別室へ退いた後へ、王の日頃信頼してゐるバルメニオ將軍から、王にあてた密書が届いた。

- 二 名物の馬市が始まつてゐるといふので、朝から見物に行きま
した。
- 三 馬のそばを通るのは危険なやうですが、なれると平氣になり
ます。
- B 次の文から助詞をぬき出し、その種類をいへ。
- 一 太郎さんは、雨が降つて、つまらないなあ、といひながら、傘をさ
して出かけました。
- 二 少し行くと、時計屋の内からラヂオが聞えて來ました。
- 三 雨は今夜のうちにやんで、明日は天氣がよくなりませう。
- 四 昔から、雪は豊年の兆、といふから、今年もよくみのるだらう。
- 五 萬年筆なり鉛筆なり、そこにあるので書くがいい。
- C 次の文を單語に分ち、一々の單語の品詞と、活用ある語ならば、そ
の活用のしかたとを述べよ。
- 一 けなげな娘の言葉は遂に父を動かした。二人は早速ボート

- を|出す|支度|を|始めた。
- 二 日本帝國は、世界に類の無い立派な美しい國であります。
- 三 私はこの國に生れたことを、一日も感謝しないことはありません。
- 四 あなたもずゐぶん大きくなりましたね。私もあなたのお父
さんなどと一緒によく道普請みちしんに出たものでした。
- 五 「叔父さん、勳章がふえましたね。それは金鷄勳章でせう。」あ
あ、今度の戦争でいたゞいた。
- 六 かう成るまでには、叱られたり笑はれたり、つらい事も少くは
なかつた。
- 七 晝でも夜でも、暇さへあれば考へて見たけれども、しかしたゞ
考へるだけでは、いけなかつた。

- 一 彼は山又山を越えて遠くかなたに去れり。
- 二 將軍の名は國內に傳はり、その肖像畫はいづこの店頭にも飾られたり。
- 三 村長に對する村民の敬愛はすこぶる厚し。されば勤續することすでに二十餘年なり。
- 四 語る言葉もうち解けて、われはたゞへつかの防備。かれはたへつわが武勇。
- 五 かしこに見ゆるは、停車場及びその官舎なり。
- 六 そはいと名殘惜しき事なり。されば謝恩の爲に、何か畫がきて參らすべし。
- 七 我若し死したりと聞かば、汝必ずこれを持ち去りて、日本の役所に差出すべし。
- 八 こは思ひも寄らぬ仰かな。わが望こそかなひたれども、君の御恩は未だ報い奉らず。たゞいづかたへも御供仕るべし。

- 九 勤務は午前八時より午後四時まで。但し土曜日は正午まで。
- 一〇 われもとより賤しき身なれども、この事を承りて餘りの忝さに、そゞろに涙を催し候。

第二十章 文語動詞の活用の種類(二)

文語動詞の活用形

〔查〕文語の動詞には、口語と同じく六つの活用形がある。しかし、その名稱と用法とは、口語動詞といくらか違ふ所がある。

未然形 「ず」に連る形である。又「むん」「ば」などにも連る。

打たず 讀まむ(ん) 降らば

連用形 「たり」に連る形である。また他の用言にも連り、「て」「き」「けり」などにも連る。

讀みたり 降り始む 打ちて

終止形 言ひ切る場合に用ひる形である。

打つ。 讀む。 降る。

連體形 體言に連る形である。

打つ人 讀む時 降る雪

已然形 「どども」に連る形で、又「ば」にも連つて、動作が既にさうなつた意味に用ひる。

打てども響かず。 今日雪降ればいと寒し。

注意一 文語の已然形は口語の假定形にあたる。口語では「降れば」

「打てば」等を假定の意に用ひることが多いので、「降れ」「打て」等を假定形と名づけたのである。

注意二 文語で假定の意味は未然形に「ば」の附いたもので表はす。

雪降らば寒からん。 打たば響かん。

命令形 命令の意を表はす爲に用ひる形である。

打て。 讀め。 降れ。

〔空〕 文語の動詞の活用のしかたは、口語とは違つた所がある。

次にこれをくらべて示さう。

〔空〕 四段活用 口語の四段活用動詞の大部分は、文語に於ても口語と同様に活用する。この種類の活用を四段活用といふ。

口語	文語	語	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	(文)已然	(口)假定	命令
讀む	讀む	讀	讀	讀	ま	み	む	む	め	め	め

〔空〕 ナ行變格活用 口語四段活用の動詞の中、「死ぬ」は文語で

は次のやうに活用する。

口語	文語	語	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	(文)已然	(口)假定	命令
死ぬ	死ぬ	死	死	死	な	に	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ

ナ行變格活用

右の様に、文語の「死ぬ」は、なにぬぬるぬれと變化する。この様な活用をナ行變格活用(略稱ナ變)といふ。

ナ變に屬する動詞は、「死ぬ」「往ぬ」の二語である。

○死ぬは現代文では、ナ行四段活用にも用ひる。「往ぬ」は今はあまり用ひない。

〔六〕ラ行變格活用　口語の四段活用動詞の中、「有る」は、文語では次のやうに活用する。

口語	文語	語							
有る	有り	有	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	(文)已然
		有			ら	り	る	る	(口)假定
					ら	り	る	る	命令
					り	り	る	る	
					る	り	る	る	
					る	る	る	る	
					れ	れ	れ	れ	
					れ	れ	れ	れ	

右の様に、文語では終止形が「あり」となる。終止形がイ段の音で終るのは、動詞ではこの外に例がない。この様な活用をラ行變格活用(略稱ラ變)といふ。

ラ行變格活用

下一段活用

ラ變に屬する動詞は、「有り」「居り」「侍り」である。

○居りは現代文では、ラ行四段活用にも用ひる。「侍り」は今はあまり用ひない。

〔七〕下一段活用　「蹴る」は口語では普通ラ行四段に活用するが、文語では、その活用は口語力行下一段の動詞と殆ど同一である。之を文語の下一段活用といふ。

口語	文語	語							
蹴る	蹴る	蹴	未然	連用	終止	連體	(文)已然	(口)假定	命令
けら	け	け	け	け	ける	ける	けれ	けれ	けよ
けり	けり	けり	けり	けり	ける	ける	けれ	けれ	けよ
ける	ける	ける	ける	ける	ける	ける	けれ	けれ	けよ
ける	ける	ける	ける	ける	ける	ける	けれ	けれ	けよ
けれ	けれ	けれ	けれ	けれ	けれ	けれ	けれ	けれ	けよ
けれ	けれ	けれ	けれ	けれ	けれ	けれ	けれ	けれ	けよ

○文語下一段の命令形には「ける」の形を用ひない。

文語下一段活用に屬する動詞は「蹴る」だけである。

○蹴るは、用言に連る場合だけは、口語でも「けたふす」「けつまづく」など、「け」を用ひるのが普通である。

練習題 二〇

次の文語動詞の活用のしかたを示せ。

泣く 喚ぐ 貸す 待つ 縫ふ 呼ぶ 蹴る
散る 散らす 抜く 在り 折る 居り 編む

上一段活用

第二十一章 文語動詞の活用の種類(二)

〔七〕上一段活用 口語上一段活用の動詞の中「着る」は文語では左の如く活用し、口語と殆ど同一である。之を文語の上一段活用といふ。

口語	文語	語	未然	連用	終止	連體	(文)已然 (口)假定	命令
着る	着る		さ	さ	さる	さる	され	きよ きろ

即ち、口語の命令形の「きろ」だけは文語に用ひない。

○文語上一段活用の動詞は「カナ・ハマ・ヤ」の各行にある。
○文語上一段活用に屬する動詞は「着る」「煮る」「見る」「射る」「鑄る」「居る」に率ゐるなどである。

〔七〕上一段活用 口語上一段活用の動詞の中、文語で上一段に活用するものの外は、大概之と違つた活用になる。たとへば「起さる」の文語の活用は、次の通りである。

口語	文語	語	未然	連用	終止	連體	(文)已然 (口)假定	命令
起さる	起く	起 <small>おこ</small>	さ	さ	さる	さる	され	きよ きろ

活用

右の様に、文語では、語尾は「きく」即ち五十音圖の「イウ」二段の音と、それによる「れよ」の附いたものとである。この様な活用を上

二段活用といふ。

○上二段活用の動詞は、カガクダハハマヤラの各行にある。

〔七〕下二段活用 口語下一段活用の動詞は、文語では大概違つた活用になる。たとへば「受ける」の文語の活用は次の通りである。

口語	文語	語	語幹		未然	連用	終止	連體	(文)已然	(口)假定	命令
			受	受							
受ける	受く		け	け	ける	け	く	ける	く	くれ	けよ
											けるよ

右の様に、文語では、語尾は「けく」、即ち五十音圖の「エウ」二段の音とそれになる「れよ」の附いたものとである。この様な活用を下二段活用といふ。

○下二段活用の動詞は、五十音圖の各行と「ガザダバ」の各行とにある。

下二段活用

○文語に、下一段活用の動詞(蹴る)があるが、それは口語では普通ラ行四段に活用する。

練習題 二一

A 次の文語動詞の活用のしかたを示せ。

- 過ぐ 恥づ 強ふ 尋ぬ 植う 逃ぐ 任す
- 報ゆ 懲る 恨む 混す 周章つ 教ふ 求む
- 越ゆ 枯る 飢う 落つ 撫づ 吠ゆ 考ふ

B 次の漢字を口語と文語との動詞に用ひて、その活用のしかたを比べて見よ。

- 老 据 殖 換 下 怖 生 生 絶 並 合 觸

第二十二章 文語動詞の活用の種類(三)

〔七〕カ行變格 口語カ變の動詞「來る」は、文語では次のやうに活用する。

カ行變格活用

口語	文語	語
來 <small>く</small> る	來 <small>く</small>	未然
こ	こ	連用
き	き	終止
く <small>ろ</small>	く <small>ろ</small>	連體
くる	くれ	(文)已然
くれ	こ <small>よ</small>	(口)假定
こ <small>い</small>	命令	

このやうな活用を、文語でもカ行變格活用(カ變)といふ。その終止形と命令形とに於て口語と違ひがある。

〔五〕サ行變格 口語サ變の動詞「爲す」は、文語では次の如く活用する。

口語	文語	語
爲 <small>す</small> る	爲 <small>す</small>	未然
し <small>せ</small>	せ	連用
し	し	終止
す <small>る</small>	す <small>る</small>	連體
する	すれ	(文)已然
すれ	せ <small>よ</small>	(口)假定
し <small>せ</small> ろ <small>よ</small>	命令	

このやうな活用を、文語でもサ行變格活用(サ變)といふ。その

サ行變格活用

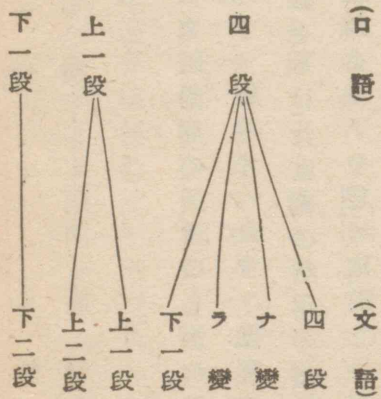
口語動詞と文語動詞との異同

終止形が口語と違ひ、又口語の命令形の中、「しろ」は文語には用ひない。

○文語でも、名詞や漢語等を動詞にするには、サ變にするのが普通である。

罪す 勉強す 製す 論す

〔五〕以上に述べた口語動詞と文語動詞との活用の種類を對照して示せば、次の通りである。



カ	變	カ	變
サ	變	サ	變

練習題 二二

A 次の文語動詞の活用のしかたを示せ。

與よす 輕かろんず 命いのちす 理ことわり解とす 來く 安やすんず 案あんず 譯わけす

B 傍線をつけた動詞の活用の種類を考へよ。

- 一 社前より下を望めば、美しく彩色したる土佐繪に向ふ趣あり。
- 二 壁の如く立ちたる岩の面を、垂れたる鎖傳ひつゝ攀よぢ登る。
- 三 茶屋に歸りて預け置きたる傘外套など受け取り、これより主峰を指して右の方に入る。
- 四 刈り果てたる田つらには下りゐる鳥さへ見えて、豊かなる秋の煙満ちわたる。
- 五 左に折れて池畔を過ぎ、又右に曲りて廣場に出づれば、中央に立てるは將軍の銅像なり。

- 六 常世は、ちぎれたる具足を着け、さびたる長刀を横たへ、わるびれたる様もなく、進みて御前にかしこまる。
- 七 降り積れる雪も跡なく消えて、山河草木喜びにあふるる春は來ぬ。

C 次の文に誤があつたら正せ。

- 一 水を買うなどいふは、思ひもよらぬ事なり。
- 二 若き時學ばずば、老ひて悔うる時あるべし。
- 三 國家の榮へん事を願ひて、絶へず産業を獎勵せり。
- 四 自ら深くその誤を恥じて、再び人に教ゆるを欲せず。
- 五 輝元大軍を率い來りて、宗治を救はんとせしが、秀吉に敵すべからざるを察して、和を請えり。
- 六 鹿追う獵師は山を見ず、飢へたる者は食を擇えらばず。
- 七 敵攻寄すとも、城門を閉じて、決して出することなかれ。

文語形容詞の活用形

第二十三章 文語形容詞の活用と形容動詞
〔夫〕文語の形容詞には五つの活用形がある。その名稱と主な用法とは次の通りである。

未然形 「ば」に連つて、假定の意味を表はす形である。
價高くば買ふまじ。新しくば買はん。

注意 口語の形容詞には未然形なく、假定の意味を表はすには假定形を用ひる。

連用形 動詞に連る時の形である。又口語「ても」の意味の「とも」に連る。

價高くなる。新しくとも買ふまじ。

終止形 言ひ切るのに用ひる形である。

價高し。品新し。

文語形容詞の活用

〔主〕形容詞の活用は、口語では一種であるが、文語では二種になる。

ク活用 口語の「高い」は、文語では次の様に活用する。

口語	文語	語	語幹	語尾	未然	連用	終止	連體	(文)已然	命令
高い	高し								(口)假定	
		高 ^{たか}			く。	く	し。	き。	け	れ
						い。	い。	け	れ	

連體形 體言に連る形。
高き價。新しき品。
已然形 「ど(ども)」に連る形で、又「ば」にも連つて、已^まにさうである意を表はす。
價高ければ買はず。新しけれど(ども)買はず。

注意 文語の已然形は、口語の假定形と同じ形である。

かやうに、語尾がくくしきけれと變るものをク活用といふ。
 シク活用 口語の「新しい」は、文語に於ては次の様に活用する。

口語	文語	語	語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	(文)已然 (口)假定	命令
		新し	新						
新しい	新し	新	新	く	く	い	い	け	れ

かやうに語尾がしくしくしきしけれと變るものをシク活用といふ。

○口語形容詞の語幹が「し」で終るものが文語ではシク活用となる。
 ○シク活用の形容詞は、文語と口語とで語幹が違つてゐる。即ち、文語では、口語の語幹の終の「し」を除いたものが語幹となり、「し」は語尾となる。

〔夫〕文語の形容動詞には、次の様に三種ある。活用は何れもラ

文語の形容動詞の種類

行變格活用に準ずる。

種三第	種二第		種一第		語幹/語尾	未然	連用	終止	連體	(文)已然 (口)假定	命令
	語文	語口	語文	語口							
泰然	洋々	丁寧か	丁寧か	嬉暑し	嬉暑 ^{あつ} し	たら (バムズ)	たり (ケキ)	たり	たる	たれ (バド)	たれ
		だ ^ら	な ^ら	か ^ら	か ^ら	だ ^ら	な ^り	な ^り	な ^る	な ^ら	な ^れ
		だ ^ら	な ^ら	か ^ら	か ^ら	だ ^ら	な ^り	な ^り	な ^る	な ^ら	な ^れ
		だ ^ら	な ^ら	か ^ら	か ^ら	だ ^ら	な ^り	な ^り	な ^る	な ^ら	な ^れ

第一種第二種は、口語の第一種第二種にあたる。第三種は口語にはない。

○第一種の終止形及び已然形は、現代文では殆ど用ひられない。

練習題 二三

次の文から形容詞形容動詞をぬき出し、その活用をいへ。

- 一 大國主命は、恭しく國土を天照大神に奉りぬ。大神その真心の厚きを賞して、命の爲に壯大なる宮殿を造らしめ給ふ。
- 二 縦は柔かにして工作に便なれば、箱類を作るに用ひられ、梅は堅くして久しきに耐ふるが故に、家屋の土臺となすに宜し。
- 三 波靜かなる島のあたり、高く低く群飛ぶかもめは、落花の風にひるがへるに似たり。
- 四 近頃は容態殊に悪しく候へば、命の限りも遠からじと、一同あきらめ居り候。
- 五 堂々たる風采と朗々たる音聲とは、まづ聽衆の心を動かしたり。
- 六 いかなる所にも樂しき地はあるべく、またいかなる所にも樂しからざる地はあるべし。

文語動詞の音便形

- 七 諺に「始よければ終よし」ともいひ、又「始あしければ後よし」ともいふ。

第二十四章 文語用言の音便形

〔五〕文語の用言にも音便形がある。その中、動詞の音便形は、主として四段ナ變、ラ變の動詞が助詞「て」に連る時に現はれる。その形及び種類は口語のと同じである。

- 一、語尾がイとなるもの(イ音便) カ行四段のキ、ガ行四段のギから。(ガ行の時は「ては」てとなる。) 聞いて(聞きて) 塞いで(塞ぎて)
- 二、語尾がウとなるもの(ウ音便) ハ行四段のヒから。言うて(言ひて) 請うて(請ひて)
- 三、語尾がンとなるもの(撥音便) バ行四段のビ、マ行四

段のミ、ナ變のニから。(てはて)となる。

運んで(運びて) 踏んで(踏みて) 死んで(死にて)

四、語尾が促音となるもの(促音便) 夕行四段のチ、ハ行

四段のヒ、ラ行四段のリ、ラ變のりから。

勝つて(勝ちて) 養つて(養ひて) 刈つて(刈りて)

有つて(有りて)

文語形容詞の音便形

〔ハ〕 文語形容詞の音便形は、主として連用形が他の用言に連る時、又は連體形が助詞「かな」に連る時に現はれる。ウ音便形とイ音便形とがある。

日も高う(高く)なりぬ。 雨烈しう(烈しく)ふる。

よい(よき)かな。 悲しい(悲しき)かな。

練習題 二四

A 次の文から音便形をぬき出し、その原の形をいへ。

一 夜ふけに及んで松明の光おびたゞしう見ゆ。

二 清正は片鎌槍をしごいて突いてかゝる。

三 道に迷うて小川に出で、流れに沿うて下れば、一寒村に出づ。

四 こはいかに、降つて湧いたる敵の大軍。

五 人に長たるも、またかたいかな。

B 次の文に誤があつたら正せ。

一 仰ひで天の高きを見る。

二 勇むで家を出でたり。

三 重荷を負ふて坂を登る。

四 鹿毛なる馬に黒鞍置ゐて乗つたりけり。

五 言うてかひ無き事をなげくは愚なり。

六 飛むで火に入る夏の蟲。

七 人を疑う前に、まづ自己を省みよ。

使役の助動詞

〔八五〕

使役の助動詞

す さす しむ

弟に苗木を買はす。苗木を庭に植ゑさす。
苗木を鉢に移さしむ。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ
						下二段活用

「す」は、四段ナ變・ラ變の動詞の未然形に付き、「さす」は、その外の活用の未然形につく。「しむ」は、すべての動詞の未然形に附く。

○「さす」がサ變の動詞に附いて、「携帯せさす」「選舉せさす」といふべきを、現代の文語では、「携帯さす」「選舉さす」ともいふ。

打消の助動詞

〔八六〕

打消の助動詞

ず さり

花は未だ咲かず。
群衆は既に散じて一人も見えざりき。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	
さり	ざら	ざり	(ざり)	ざる	ざれ	ざれ
						ラ變

「ず」「ざり」は、動詞の未然形に附く。

練習語 二五

傍線を附けた助動詞の種類と、その活用のしかたとを述べよ。

一 彼の眺め入りしは繪にあらす、實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。

二 今日文明の利器と稱せらるるものにして、エヂソンの天才によらざるもの殆どなしといふ。

「き」「けり」「ぬ」「つ」「たり」は、動詞の連用形に附く。但し「き」「ぬ」には、次の例外がある。

一、「き」の終止形は、カ變の動詞には全く附かず、連體形已然形は、その未然形にも附く。又「き」の連體形已然形はサ變の動詞の連用形には附かず、その未然形に附く。

こ	し	し
し	か	し
せ	し	し
し	か	し
き	し	し
し	か	し
し	き	し
し	き	し

二、「ぬ」は、通例ナ變の動詞には附かない。

「り」は四段活用の動詞の已然形と、サ變の動詞の未然形にだけ附く。

われ等は全力を盡せり。

われ等は最後まで、努力せり。

「けり」は、また咏歎の意味に用ひることがある。

小さき蟲にも心はありけり。

〔八〕 推量の助動詞 らし む(ん) らむ(らん) けむ(けん)

べし まじ じ

彼處にも雪は降るらし。

麓には旅店もあらむ。

明日も雨降らむ。

雲のいづくに月宿るらむ。

昔の友はいづち行きけむ。

演習に参加する軍艦は百艘を超ゆべし。

如何なる敵にも敗るまじ。

喜の來らむ日も遠からじ。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
らし			らし	(らし)	(らし)	
む			む(ん)	む(ん)	め	
らむ			らむ(らん)	らむ(らん)	らめ	
けむ			けむ(けん)	けむ(けん)	けめ	
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	
じ			じ	(じ)	(じ)	
						變化せず
						シク活用
						ク活用
						四段活用
						四段活用
						四段活用
						變化せず

「らし」「らむ」「べし」「まじ」は、動詞の終止形に附く。但し、ラ變の動詞には、その連體形に附く。「あるらし」「あるらむ」「あるべし」「あるまじ」など

「む」「じ」は動詞の未然形に附く。

「けむ」は、動詞の連用形に附く。

○む「らむ」けむは、發音に従つて「らん」「けん」とも書く。

以上の外に「べし」の連用形と「あり」とから出來た「べかり」といふ助動詞がある。第一種形容動詞と同活用であるが、現代の文語では、その終止形以下はあまり用ひない。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
べかり	べから	べかり	(べかり)	(べかる)	(べかれ)	

希望の助動詞

〔八九〕希望の助動詞 たし まほし

早く家に歸りたし。一人行かまほし。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	
						ク活用
						シク活用



「たし」は動詞の連用形に付き、「まほし」は未然形に附く。

練習題 二六

傍線を附けた助動詞の種類と活用のしかたとを述べよ。

- 一 たのしみは朝起き出でて昨日まで無かりし花の咲ける見る時。
- 二 その人の御名は聞かざりしかども荷物のさげ札に「市」の字ありしを見覚えたり。
- 三 右に見ゆるは山にはあらし雲ならんと云ふ者もありき。
- 四 子等はいづかたへか行きつらん音だに聞えずなりぬ。
- 五 さし昇る朝日の如くさわやかにもたまほしきは心なりけり。
- 六 何故に國を去らんとまで思ひ立ちけんとなあやしく候。
- 七 足らぬ事なき身には成りけれどもなほ貧しき昔を忘れざりき。
- 八 汝かの地に行かば必ずや人に怪しまれて、或は命も危かるべし。

敬讓の助動詞

- 九 この分ならば別條あるまじく存じ候に付、御安心下されたく候。
- 一〇 義時しば／＼上皇の仰にそむきしかば、上皇大いにいさどほり給ひ、國々の武士を召して、義時を討たしめ給ひき。

第二十七章 文語助動詞の種類と活用(三)

〔否〕 敬讓の助動詞 する する させしむ

主人は毎日五時に歸らる。

先生は朝六時に起きらる。

殿下も會に臨ませらる。〔せはすの未然形〕

殿下は快く之を受けさせ給ふ。〔させはさすの連用形〕

陛下親しく閱兵せしめ給ふ。〔しめはしむの連用形〕

指定の助動詞

「る」「らる」の活用は、受身の「る」「らる」と同じである。また動詞への付き方も、受身の「る」「らる」と同じである。「す」「さす」「しむ」の活用は使役の「す」「さす」「しむ」と同じである。但し現代の文語では、他の敬意を示す語と共に用ひるのが普通で、その終止形以下はあまり多く用ひない。「給ふ」「奉る」「参らす」「候ふ」等も、敬讓の助動詞の様に用ひられる。

〔九〕 指定の助動詞 なり たり

東京は我が國の首府なり。
心なき人は、之を見て笑ふなり。
彼の父は大實業家たりき。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ

ラ變

比況の助動詞

「なり」「たり」は體言に附く。「なり」は、その外に、用言の連體形にも附く。

〔九〕 比況の助動詞 ごとし

降る雪は花の散る(が)ごとし。
往事を思へば夢のごとし。

語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ごとし	ごとか	ごとか	ごとし	ごとき		

ク活用

「ごとし」は、動詞の連體形、又は之に助詞「が」の附いたもの、又は體言に助詞「の」の附いたものに附く。

練習題 二七

A 傍線を附けた助動詞の種類とその活用のしかたを述べよ。

- 一 天顔殊にうるはしく笑ませ給ひぬ。
 - 二 學生たるものは、すべて某の如くありたきものなり。
 - 三 陶山すやま義高等皇居に火を放ち奉れば、後醍醐天皇は終に笠置を出でさせ給ふ。
 - 四 人々もはじめ一二町が程は、主上を扶けまゐらせて、前後に御供申されけり。
 - 五 雨の降るかと思召して、木蔭に立寄らせ給へば、木の下露のらはらと御袖にかゝるなりけり。
- B 次の文から助動詞をぬき出し、その活用のしかたを示せ。
- 一 観音寺には、藤原藤房卿の念じ給ひける観音を安置せり。
 - 二 佛前には五十餘歳の旅商人ありて、さめくと泣きゐたり。
 - 三 うちつけにその故を問ふべきにあらねば、われも立去りて元の驛路に出でぬ。
 - 四 麓に松林に包まれて立てる神社あり。里人に問へば八幡宮

第二十八章 文語の助詞

- 五 かの建御雷神が大國主命と會見せられしは、此處なるべしといふ。
- 六 そのかみ此處にいかめしく向ひあひけん英雄の姿、今まのあたり見るが如し。
- 七 明治神宮の御造営には、各地より御手傳を願ひ出づる者多かりしかば、何れも十日間を限りて土木に従事せしめたるに、通常の人夫にもまさりて、仕事ははかどりたりと聞く。これも真心の致す所なるべし。

〔五〕 文語の助詞は、口語のとは違つた語を用ひる事があり、又同じ語を用ひても、意味や用ひ方の異なるものがある。

〔五〕 第一種の助詞 主として體言に附くもので「が」「の」「を」「に」

「く」「と」「より」「にて」などを用ひる。

が 口語と同じく、主語に附く外に、又體言を修飾する修飾語をつくる爲に用ひることがある。

誰が宿 梅が香 君が代

より 口語と同じく、「山より高し」のやうに用ひる外に、口語の「から」の代りにも用ひる。

大阪より歸る。 會は六時よりはじまる。

へ 文語では、主として方角を示す爲に用ひる。

西へ飛ぶ。 京都へ去る。

にて 口語の「て」の代りに用ひる。

東京にて逢ふ。 萬年筆にて書く。 病氣にて休む。

○口語の「から」では、文語には普通用ひない。

〔五〕 第二種の助詞 主として用言に附いて、接續詞のやうな

はたらきをするもので、「ば」「とも」「ど」「ども」「が」「に」「を」「つ」「ひつ」「ながら」などを用ひる。

ば 口語では用言の假定形に附いて、假定の意味を表はすが、文語では未然形に附いて、假定の意味を表はす。又已然形に附いては、口語第二種の助詞と「又は」「から」の意味を表はす。

彼行かば 我も行かむ。 價安くば 買ふべし。

風吹けば 波立つ。 心正しければ 物に恐れず。

今日は雨降れば 外出せず。

この花美しければ 人に折らるるおそれあり。

とも 動詞の終止形、形容詞の連用形に附いて、「口語の「て」」の意味に用ひられる。

繪に書くとも 筆も及ばじ。 苦しくとも 忍ぶべし。

第三種

どども 用言の已然形に附いて、口語の「けれども」の意味に用ひられる。

見れども見えず。

某は身賤しけれど、心の正しきものなり。

がにを 共に用言の連體形に附いて、口語第二種の助詞「が」の「に」の意味に用ひられる。

て 文語では連用形に付き、時として音便形に附く。

つつ 動詞の連用形につき、口語ながら「の意味に用ひられる。

○口語の「ても」「けれども」「に」「から」「ので」「し」は文語には用ひない。

〔六〕 第三種の助詞 第一種第二種以外のもの、「は」「も」「ぞ」「こそ」

「や」「か」「だに」「すら」「さへ」「のみ」「ばかり」「まで」「な」「な……」「そ」「ばや」「がな」「かな」「かし」「よ」などが用ひられる。口語と意味や用ひ方

文語の法則

の違つたものを挙げれば、

ぞやか これ等が用言や助動詞に附いて文の終りに来る

時「ぞ」「か」は連體形に、「や」は終止形に附く。

何人の言ひけるぞ。 あるかなきか。

ありやなしや

右の助詞が文の中にあつて、用言や助動詞が之を受けて文を結ぶ時、必ずその連體形を用ひる。

名残なく散るぞめでたき。 誰かある。

惜しくやあるべき。

こそ この助詞が文の中にあつて、用言や助動詞が之を受けて文を結ぶ時、必ずその已然形を用ひる。

時こそ來たれ。

かなたに見ゆる蘆屋こそ我がなつかしの住みなれ。

係結

かやうに「ぞ」「や」「か」及び「こそ」に對して、連體形及び已然形で文を結ぶのを「係結」の法則といふ。

だにすら 口語の「さへ」でもなどの意味に用ひる。

いろはだに知らず。治まれる今の世にすら此の如し。

さへ 口語の「までも」の意味に用ひる。

風さへ吹き出でたり。残る一人の子にさへ別れたり。

のみ 口語の「だけ」「ばかり」などの意味に用ひる。

彼のみ喜ばざるはずなし。

残れるはこれのみなり。

なな…そ 共に禁止の意を表はす。「な」は動詞の終止形に、

「な…そ」の「そ」は連用形に附く。

忘るな。 へ行きそ。

但し、「な」はラ變の動詞にはその連體形に附く。又「そ」は

カ變サ變の動詞には、その未然形に附く。

あるな。 な(來)そ。 なせ(爲)そ。

ばや 希望の意を表はす。動詞の未然形に附く。

問はばや遠き世々の跡。

がな 多くの場合に助詞「も」に連つて希望の意を表はす。

昔を今になすよしもがな。これ無くもがな。

かな 體言又は用言助動詞の連體形に附いて、感動の意を

表はす。

けなげなる男の子かな。 あゝ悲しきかな。

かし 言ひ切つた形に附いて、意味を強めるのに用ひる。

幸あれかしと祈る。 然覺ゆるぞかし。

練習題

二八

次の文から助詞をぬき出し、その用ひ方を説明せよ。

- 一 父母の病あつければ、醫藥の効なきを知るとも、尙治療につとむるは人情の常にあらずや。心力を盡くしてしかも救ふ事能はざるは天命なり。事既にこゝに至る。われたゞ死せんのみ。
- 二 よきを取り惡しきを捨てて外つ國に劣らぬ國となすよしもがな。
- 三 宣長は八歳の頃より讀み書きを習ひたりしが、後契沖の著せる書物を見て國學に志し、遂に一代の大學者となれり。
- 四 近き舟は行けども、遠き帆影は動かんともせず。
- 五 山櫻の朝日に匂ふ趣は、外國人の味はひ得ざるところなり。
- 六 之を聞いて誰か憤らざるべき。
- 七 今こそ起つべき時なれとて、急に兵を率ゐて隣國に攻入れり。

練習題

二九

次の文から、活用のある語をぬき出し、その活用のしかたを示せ。

- 一 行幸あまりに遅かりしかば、人をしてうかゞはしむるに、播磨の今宿といふ處より、山陰道にかゝり給ひし由なり。
- 二 さらば美作の杉坂に待ち奉らんとて、げはしき山路をふみわけてたどり着きたりしに、主上はや院庄に入らせ給ふといふ。高德せめてはこの所存を君に知らせ奉らばやとて、夜にまぎれて行在所の御庭にしのび入り、櫻の幹をけづりて詩の句を書きつけたり。
- 三 不思議や、今まで荒れわたる大海、おのづから静まりて、穩かなる風となり、尊はつゝ、がなく上總の國に着き給ひきといふ。
- 四 花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客、今日も清水觀音の堂前に満てり。
- 五 暮色は東山を籠め、叡山を廻り、賀茂川におそひ來りて、清水の塔もやうやく隠れぬ。
- 六 兩側には松杉天を蔽ひて晝なほ暗く、立ちまじる紅葉の色は
- 七

松明たいまつの光と見えて面白おもしろき山路なるが、殊ことに美うつくしきは白膠木ぬるぎにて、楓かへではあまり多からず。

練習題 三〇

- A 「練習題二八」の文から助動詞をぬき出し、その活用のしかたを示せ。
- B 「練習題二九」の文から助詞をぬき出し、その用ひ方を説明せよ。
- C 「練習題二八・二九」の文から副詞をぬき出し、かつその被修飾語を示せ。

第四篇 品詞の轉成と語の構成

第二十九章 品詞の轉成

〔七〕

- (甲) どう考へてもわからない。
- (乙) そんな考へは宜しくない。

(甲)の「考へ」は動詞であり、(乙)の「考へ」は名詞である。動詞から名詞に轉じたのである。

- (甲) あはれ、勇ましき武者振かな。(文)
- (乙) いとゞあはれを催せり。(文)

(甲)の「あはれ」は感動詞として用ひられてゐるが、(乙)の「あはれ」は、それから轉じて名詞となつてゐる。かやうに、或品詞に屬する語が、意味用法を變じて他の品詞となる事を品詞の轉成といふ。

品詞の轉成

名詞になつたもの

〔六〕品詞の轉成には、次のやうな種々のものがある。
一 名詞になつたもの

動詞の連用形から

光ひかり 笑わら 教おし とめ(人名)

そめ(人名)

向むかふの山 勉つとむ人名 透とほろ人名

動詞の終止形から
形容詞の連用形から

近くに住む 遠くの國
多くを望まない

代名詞になつたもの

二 代名詞になつたもの

名詞から

君 僕 わらは(文)

形容詞になつたもの

三 形容詞になつたもの

名詞から

大人しい 黄色い

動詞から

いさましい なつかしい

さわがしい うらめしい

副詞になつたもの

四 副詞になつたもの

副詞から

たのもし

甚(文)のどけ(文) 静(文)け(文)

名詞から

つゆ知らず(文) ゆめ忘るべ(文)からず(文)

動詞から

あまりひどい

接續詞になつたもの

五 接續詞になつたもの

動詞から

陸軍及び海軍

副詞から

山また山を越ゆ(文) もつとも

助詞から

が で けれども

感動詞になつたもの

六 感動詞になつたもの

代名詞から

これ あれ それ どれ

副詞から

いかにいかに、辨慶(文)など(文)

練習題

三一

次の文から轉成の品詞を選び出し、何から轉じたかを述べよ。

- 一 山の上には蚊も居ないし、又蠅も居ない。
- 二 君は色々むづかしい事をいふが、つまりどうすればよいのか。
- 三 あまり遠くへ行つては歸れなくなりませよ。
- 四 はじめの調子はよかつた。が終おしまりに近づくと、すつかり亂れてしまつた。
- 五 どれ、私も出かけよう。
- 六 明日午前中に御出で下され度候。もつとも御都合により、午後ごちゆうにても差支さしつか之なく候。(文)
- 七 吉野山霞の奥は知らねども見ゆるかざりは櫻なりけり。(文)

第三十章 複合語

複合語

〔九〕二つ以上の單語が合して一語となつたものを複合語とい

複合の名詞

ふ。複合語は、文法上一つの單語として取扱はれ、何れかの品詞に屬する。その主なものは、次の通りである。

一名詞

- | | | | | |
|------|-------|------|------|-----------|
| 山櫻 | 朝日 | 電車道 | インキ壺 | (名詞と名詞) |
| 筆入 | 鉛筆削 | ズボン釣 | | (名詞と動詞) |
| 買物 | 落葉 | 涼臺 | | (動詞と名詞) |
| 飲食 | 讀書 | 話しあひ | | (動詞と動詞) |
| たゞもの | また從兄弟 | | | (副詞と名詞) |
| 人々 | 月々 | ひとりぐ | | (同じ名詞と名詞) |
- 右の通り、動詞が複合語をつくるには、連用形を用ひるのが常である。然るに、形容詞はその語幹を用ひるのが通則である。
- | | | | | | |
|----|----|----|----|-----|------|
| 近道 | 遠山 | 輕石 | 高橋 | 嬉し涙 | まうけ高 |
| 端近 | 夜長 | 足弱 | | | |

複合の代名詞

二 代名詞
高飛 遠廻 苦笑 遠淺 高低
誰それ どこそこ なにく
だれく

(代名詞と代名詞)

複合の動詞

三 動詞

持ち上げる 追ひ出す 見送る
心ざす 物語る ゑがく
近寄る 長びく 若がへる

(動詞と動詞)

(名詞と動詞)

(形容詞と動詞)

「噂する」「吟味する」「感ずる」なども複合動詞である。

複合の形容詞

四 形容詞

名高い しほからい 胸ぐるしい
むしあつい 見ぐるしい
細長い 暑苦しい 薄寒い

(名詞と形容詞)

(動詞と形容詞)

(形容詞と形容詞)

複合の副詞

五 副詞

誠に
なにしろ
至つて 却つて
絶えず 思はず
どうぞ どうか

(名詞と助詞)

(代名詞と動詞)

(動詞と助詞)

(動詞と助動詞)

(副詞と助詞)

複合の接續詞

六 接續詞

ところが ところで
それから それで それに そこで
並びに したがつて すると
又は
だが ですけども だから

(名詞と助詞)

(代名詞と助詞)

(動詞と助詞)

(副詞と助詞)

(助動詞と助詞)

疊語

ては ても

(助詞と助詞)

○「人々」「月々」「ひとりごと」などに「く」などのやうに、同じ語を重ねて出來た複合語を特に疊語といふことがある。

〔100〕 單語が合して複合語となる時、その單語の音が變ずる事がある。

しろ(白)―ほ(帆) しらほ(白帆)

さけ(酒)―をけ(桶) さかをけ(酒桶)

はる(春)―あめ(雨) はるさめ(春雨)

ほん(本)―はこ(箱) ほんばこ(本箱)

この中、「はこ」が「ほんばこ」に於て「ばこ」となるやうに、下の語の最初の音が濁音になる事を連濁といふ。

練習題

三二

A 次の文から複合語を抜き出して、それがいかなる品詞に屬する

連濁

か、又いかなる語から出來てゐるかを述べよ。

一 シベリヤの夏は、夜半でも日本の六時頃よりもつと明るい。

二 賑かな人聲がするので、そつと板塀の隙間からのぞいて見ると、十人あまりの男が、庭の踏石の上に大きな孤冠こまがぶりを据ゑて、酒盛をするのであつた。

三 朝霧が晴れて、あちらこちらで雀の鳴聲がする。

四 旅立つ人々と見送る人々とは、互に別れを惜しんでゐた。

五 近寄つて見ると、その中に隣村となりむらの幼友達こどもたちが一人居た。

六 義經、試みに數匹の馬を追落したるに、籠かごに下り着きて、立ち上れる馬あり。(文)

七 敵は果して不意を討たれ、あわてふためきつゝ、船に乗りて、皆散り、に逃げ行きたり。(文)

B 次の語の品詞とその成立とを述べよ。

道傍みちばた 賣出日うりだしび 只事ただごと むだづかひ

飛び上がる 名づける 待ち遠い
幸に(成功した) どうぞ(御出で下さい)

第三十一章 接頭語・接尾語

〔101〕 お寺 す足 さまよふ(文)

右の「お」「す」「さ」は「寺」「足」「まよふ」のやうな語の上に附いて、之に或意味を付け加へてゐる。かやうに、いつも他の語の上に附いて、或意味を加へるものを接頭語といふ。

〔101〕 春めく 佐藤さん 神さぶ(文)

右の「めく」「さん」「さぶ」は「春」「佐藤」「神」などの語の下に附いて、之に或意味を付け加へてゐる。かやうに、いつも他の語の下に附いて、之に或意味を加へるものを接尾語といふ。

〔101〕 接頭語及び接尾語は、決してそれだけでは用ひられず、必

接尾語

接頭語

接辭

接頭語と品詞

接頭語の主なもの

接尾語と品詞

接尾語の主なもの

ず他の語に附いてあらはれる。かやうなものを接辭といふ。接辭が附いたものは、文法上、一語として取扱ふ。

〔102〕 接頭語の附いて出來た語の品詞は、もとの語と同一である。

接頭語の主なものは、次の通りである。

お宅 御縁 はつ春 まつ先 まん巾

き蕎麥 す顔 (名詞)

小高い か弱い お早い (形容詞)

こざれいにお静かに (副詞)

〔105〕 接尾語の附いて出來た語の品詞は、接尾語によつてきまる。

接尾語の主なものは、次の通りである。

一 名詞又は代名詞を作るもの

- 大尉殿 齋藤さん 神様
- 家来ども 親たち 學生等 あなたがた
- 三枚 五疋 五番目
- 深み 苦しみ いやみ 高さ 悲しさ 寒け
- 二 動詞を作るもの
 - 春めく 學者ぶる 面白がる 羨しがる
 - 窮屈がる いやがる
- 三 形容詞を作るもの
 - 男らしい 議論がましい
- 四 副詞を作るもの
 - 花やかに はれやかに

練習題

三三

A 次の文から接頭語・接尾語の附いてゐる語を選び出せ。

- 一 小一時間も闇の中に立つてゐると、真夜中のうすら寒い風が、しん／＼と身にしみてきた。
- 二 さつと吹く風と共に黄ばんだ木の葉が、遊んでゐた子供の頭にはら／＼と散りかゝつた。
- 三 私たちも、おとうさんに連れられて、兵隊さんの見送りに行き、ました。
- 四 うすら寒くなる頃には、山は一面に黄色くきれいに見えます。お宮の真上に美しい虹が現れました。
- 五 さ夜ふけて、ほの暗き燈の影、ものさびし。
- 六 片田舎より差出でたる人こそ、萬づの道に心得たる由のさしいらへはすれ。

B 次の語から接尾語を抜き出せ。

- 宮様 子供らしい 三軒目 大人ぶる 私ども
- 眠け 歸りがけに 悲しがる 勝手がましい

第五篇 文

第三十二章 文の成分(一)

[10R]

(甲) 春が来た。

(乙) 桃の花も咲きたり。(文)

右の例は、何れも一つの纏まとまつた思想を云ひ表はす一つとすべきことばであつて、即ち文である。文は單語から成立つてゐる。然るに、「春が」来た「桃の花も」咲きたりは、いくつかの單語が結合して或意味を表はしてゐるが、まだ全部が纏まとまつて一の文を成すに至つてゐない。かやうな單語の結合して、まだ文にならないものを連語れんごといふ。

連語の中、助動詞が他の語に附いたものを活用連語といふ。
来た。 見ない。 あるらしい。 犬だ。

文

連語

活用連語

咲きたり。 攻めらる。 學校なり。 雪の如し。(以上文)

これらは活用連語である。

[10R]

(甲) 月が山から出た。

(乙) 日海に没す。(文)

右の(甲)の文は六つの單語から出来、(乙)の文は四つの單語から出来てゐる。その中が「から」「た」及び「に」は附屬する語であつて、いつも「月」「山」「出」及び「海」のやうな獨立する語に付き、これ等が無ければ決して用ひられない。故に右の文は

(甲) 月が山から出た。

(乙) 日海に没す。(文)

のやうに、各三つの部分から成立つものと見ることが出来る。このやうに、文を組立てる各部分を文の成分といふ。

○文の成分には必ず獨立する語が必要である。

文の成分

〔一〇八〕 文の成分には次の四種類がある。

主語 述語 修飾語 獨立語

練習題

三四

A 次の文から活用連語を選び出せ。

一 貧しい人々のあはれな有様に心をうたれて、これからはわがまゝの念は起すまいと決心しました。

二 葛飾北齋は、西洋畫の研究から一種の寫生の繪を創めた人です。

三 諸外國の國旗に對しても敬意を表すべし。(文)

B 次の文を成分に分ち、その中の獨立する語と附屬する語とを指摘せよ。

一 獨逸軍はバリーに迫りました。

二 お前は會稽の恥を忘れたか。

三 おや、太郎が居ない。何處へ行つたらう。

四 萬歳の聲に送られて、全軍勇んで出發せり。(文)

五 清正は忽ち正國をねぢ伏せたり。(文)

第三十三章 文の成分(二)

〔一〇九〕

鶯が 鳴く。

庭が 廣い。

彼は 軍人なり。 又

右の文は、皆二つの成分から成立つてゐる。その中「鳴く」「廣い」「軍人なり」は、「どうするか」「どんなであるか」「何であるか」を表はすもので、之を述語といふ。「鶯が」「庭が」「彼は」「何が」「鳴くか」「廣いか」「軍人であるか」を表はすもので、之を主語といふ。

〔一一〇〕 主語になるもの

(甲) 體言

體言

主語になるもの

主語

述語

用言又は活用
連語

對等の體言の
重なつたもの

飛行機が 飛ぶ。

第一學期は 終つた。

これも 新しい。

花 咲く。鳥 歌ふ。(文)

正成は 忠臣なり。(文)

(乙) 用言又は活用連語

なまけるのは 罪惡だ。

新しいのも こはれた。

笑はれるのが つらい。

言ふは 易く、行ふは 難し。(文)

新しきが 善きにあらず。(文)

(丙) 對等の體言の重なつたもの

東京大阪は 二大都市である。

太郎と次郎が 遊んでゐる。

博物館及び動物園も 上野公園にあり。(文)

德育・知育並びに體育は 並行すべきものなり。(文)

○この場合に體言が助詞又は接續詞によつて結びつけられる事がある。

主語には助詞が附くことが多いが、文語では助詞の無いものが少くない。

〔二〕 述語になるもの

(甲) 用言又は活用連語(下に助詞が附く事がある)

電車が 走る。

電車が 走ります。

庭は 廣い。

それも 面白からう。

海は 穩かでしたか。

述語になるもの

體言に助詞の附いたもの

幹事は 君だね。

松 青く、砂、白し。(文)

何事も なかれかし。(文)

時機 切迫せりや。(文)

汝 何者なるぞ。(文)

(乙) 體言に助詞の附いたもの

これは 萬年筆さ。

幹事は 君か。

此處は いづこそ。(文)

われこそ 俊寛よ。(文)

残存者は、わづかに 三人のみ。(文)

(丙) 種々の語に動詞形容詞の附いたもの

我輩は 猫である。

種々の語に動詞・形容詞の附いたもの

あれは 學校でないか。

恩を 知らざる 者は 人にあらず。(文)

かしこに 見ゆるは 嵐山にて候。(文)

山は 高くはありません。

景色も 悪くないよ。

御心も 優しうします。(文)

室内は 静かである。

世間が 穩かでない。

趣旨は 明白に候。(文)

性 快活にはあらず。(文)

あなたも お休みなさいますか。

どなたも お歸りになりました。

殿下も 臨場し給ふ。(文)

同じ主語に對する述語が重なつたもの

法皇も ゑつぽに 入らせおはします。(文)
 私が お届け申します。
 齋藤も お願ひ致しました。
 外國人も 君徳を 仰ぎ奉る。(文)
 老臣等も 深く 頼みまゐらせたり。(文)
 電燈が 消えてゐる。
 私は 待つてをります。
 鉛筆が 捨ててある。
 城中の 敵は 既に 落ちて候。(文)
 〔二二〕 同じ主語に對する述語が重なる事がある。
 彼は 畫家^で、詩人^{だつた}。
 罌粟^{けし}の花は 赤くて、大きい。
 我々は 疲れ かつ 飢ゑた。

○この場合に助詞又は接續詞を用ひる事がある。

練習題 三五

次の文の主語と述語とを指摘し、それが如何なる語から成立つてゐるかを説明せよ。

- 一 春が來た。花がさいた。
- 二 それは何だ。
- 三 早いのがよからう。
- 四 太郎と次郎は兄弟でございます。
- 五 われ／＼も小學生ではありません。
- 六 攻むるは易く、守るは難し。(文)
- 七 水流る。(文)
- 八 人々は喜びかつ悲しめり。(文)

- 九 酒並びに煙草は衛生によろしからず。(文)
- 一〇 彼は醫師にしてかつ畫家なり。(文)
- 一一 見ると聞くとは必ずしも一致せず。(文)

第三十四章 文の成分(三)

〔三〕

きれいな花が咲いた。

風烈しく吹く。(文)

右の文に於て、「きれいな」「烈しく」は、「花」「吹く」を修飾してゐる。かやうに、他の語を修飾する成分を修飾語といふ。

猫は鼠を捕る

湯が水になる

右の「鼠を」「水に」は、何を捕るか、何になるかを示して、「捕る」「なる」の意味を精密にし、定めるものである。それ故、これも修飾

修飾語

語と見るべきである。

○右の「鼠を」「水に」は、また用言「捕る」「なる」の意味の缺けた所を補ふものと見る事が出来る。それ故かやうなものを特に補語ほごといふことがある。

修飾語の中、右の「きれいな」のやうに、體言を修飾するものを連體修飾語又は形容詞的修飾語といひ、「烈しく」のやうに、用言を修飾するものを連用修飾語又は副詞的修飾語といふ。

〔二四〕 連體修飾語になるもの

(甲) 體言その他の語に助詞「の」の附いたもの

庭の梅。

私の本。

五本の指。

昨日までの期限。

途中での出来事。

連體修飾語

連用修飾語

連體修飾語になるもの

用言又は活用連語の連體形

父よりの。たより。(文)
 暫くの。別。
 ちよつとの。違。
 遙かの。沖。(文)
 たまの。の。面會。(文)
 面白の。景色。(文)
 有難の。仰。(文)

○文語では次の例のやうに、體言に助詞「が」の附いた連語が連體修飾語となることがある。

我が家。誰が宿。
 松が枝。君が代。
 重盛が子ども。

(乙) 用言又は活用連語の連體形

對等の體言又は用言が重なつたもの

飛ぶ 蟲。
 黒い 鳥。
 立派な 家。
 錆びない ナイフ。
 歸朝した 大使。
 流るる 水。(文)
 朗々たる 音聲。(文)
 讀むべき 書。(文)
 廢止せられし 規則。(文)
 (丙) 對等の體言又は用言が重なつたもの
 愛知・静岡の。二縣。
 道德と宗教の。關係。
 赤く小さい。花。

連用修飾語になるもの

やすくつて面白い本。
佛・教・並・び・に・儒・教・の・影・響。(文)
強・く・か・つ・優・し・き・武・士。(文)

○この場合に、助詞又は接續詞を用ひる事がある。

〔二五〕 連用修飾語になるもの

(甲) 副詞

ゆつくり 歩く。
かなり 穩かだ。
遙かに 隔たれり。(文)
やゝ 遠し。(文)

(乙) 形容詞の連用形

烈しく 戦ふ。
ひどく 苦しい。

形容詞の連用形

體言

(丙) 體言

厚く 謝す。(文)
美しく 見ゆ。(文)

今 汽車が 着いた。
父は 昨夜 歸宅せり。(文)
猫は 鼠を 捕る。
猿も 木から 落ちる。
會員は 五十名と なつた。
君恩は 山より 高し。(文)
加藤氏は 國史に 精し。(文)
○この場合に、體言だけのものもあるが、助詞を附けたものが多い。

(丁) 用言又は活用連語

今日は 散歩するのを やめた。

用言又は活用連語

小さいのは 大きいのに かなはない。
言はぬは 言ふに まさる。(文)

彼の 失敗は 熟慮せざるより おこる。(文)

○以上は用言に第一種の助詞が附いたものである。口語では助詞の上に更に助詞のを附けるのが普通である。

私は 驚いて 立ち上つた。

彼は 若いのに よく 働く。

私は 勧められても 行かない。

友は 努力せしが 失敗せり。(文)

物 盛なれば 必ず 衰ふ。(文)

池水は 清澄なれども 豊富ならず。(文)

○以上は用言に第二種の助詞の附いたものである。

(戊) 對等の體言が重なつたもの

對等の體言が重なつたもの

父は 今日か明日 歸宅する。

私が 齋藤と井上に 話さう。

觀光團は 京都大阪を 見物せり。(文)

片桐且元は 秀吉並びに秀頼に 仕へたり。(文)

○この場合に助詞又は接續詞が附くことがある。

〔二六〕

きれいな 小さい 花が 咲いた。

弟の 新しい 紺の 羽織が 見えない。

吾等は 數十人の 白衣の 旅人に 逢へり。(文)

その 子は 急に わつと 泣き出した。

私は 弟に 英語を 教へる。

博士は 昨日 公會堂で 熱心に 演説された。

國民は 協力して 國難を 克服せり。(文)

隊長は 夜半に 部下をして ひそかに 敵状を

探らしむ。(文)

かやうに、同じ語に二つ以上の修飾語が附くことがある。

〔二七〕

非常に蒸暑い晩。

有益な本を著した。

学校の門の前で拾つた鉛筆。

頗る朗かなる氣質。(文)

最も困難なる問題を解決したる政治家。(文)

かやうに、修飾語は、他の修飾語に附くことがある。

練習題 三六

次の文から修飾語を選び出し、いづれの語を修飾するか、又いかなる種類の修飾語であるかを述べよ。

- 一 鳥羽僧正は滑稽な繪を描きました。が、これはたゞの漫畫とは違ひます。

二 彼はその柿を三つ續けざまに食つた。三つ目の時には顔を

少ししかめた。多分、いくらか澁いところがあつたらう。

三文鳥は、つと嘴を餌壺の真中に落した。二三度左右に振つた。

粟がはら／＼と籠の底にこぼれた。

四 雪國の兎の毛は秋までは黄色ですが、冬になると真白になります。

五 私は顔を洗ひに風呂場へ行つた。

六 太郎さんは、あまり大きな桶で水を汲んだので、疲れてしまつ

た。

七 荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、本田篤胤を國學の四大人といふ。

八 昨夜の風雨全く霽れて、日は麗かに昇りぬ。(文)

九 新院は齋院の御所より北殿に遷らせ給ふ。左府は車にて參

り給ふ。(文)

一〇 遂に行く道とはかねて聞きしかど、昨日今日とは思はざりし

- を。(文)
- 一一 幼時深く交はりたる友は、後までも思ひ出でらるゝものなり。(文)
 - 一二 人の身の上にはさまざまの苦あり。これを堪へ忍ばざれば、世に立つべからず。(文)
 - 一三 湖水より流出する水は、直ちに一大瀑布となる。その音さながら萬雷の如し。(文)

第三十五章 文の成分(四)

〔二八〕 佐藤さん、あなたは一寸お待ちなさい。
空は晴れたり。されど、海上は穏かならず。(文)

右の文に於て「佐藤さん」「されど」は、文の成分ではあるが、主語・述語修飾語の何れでもなく、他の成分とは直接の關係が無く、

獨立語

獨立語になるもの

比較的獨立したものである。かやうな成分を**獨立語**といふ。

〔二九〕 獨立語には、(一)感動又は應答を表はすもの、(二)呼び掛けるもの、(三)特に重要な事物を提示するもの、及び(四)接續の意味を示すものがある。

〔三〇〕 獨立語になるもの

(甲) 感動詞

やあ、それは大變だ。
すは、敵の押し寄せたるぞ。(文)
はい、私も参ります。
いな、われ等の知る所にあらず。(文)

(乙) 體言

太郎やお前もお出で。
嗣信、いかゞ覺ゆる。(文)

○以上は呼び掛けに用いたものである。

九月一日、私は一生この日を忘れないでせう。

大日本帝國は、萬世一系の天皇之を統治す。(文)

○以上は提示に用いたものである。

(丙) 接續詞

雨は降るらしい。けれども、風は吹くまい。

山はさまで高きにあらず。されど、道は頗る峻し。(文)

(丁) 體言が重なつたもの

あれとこれと。どちらがよい。

西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、世人は之を維新の三傑と稱す。(文)

○獨立語は主語、述語、修飾語以外の成分である。故に、その意味や形から、獨立語のやうに見えるものであつても、主語、述語、修飾語と見ることが出來

るものは獨立語としては取扱はない。

それは私は知りません。(連用修飾語)

時局は豫測し得る者なし。(文)(連用修飾語)

練習題 三七

A 次の文から獨立語を選び出せ。

一 太郎さん、御覽なさい。あれ、西の空に何だか黒い點が見えます。あゝ、だん／＼大きくなります。

二 やあ、飛行機だ、飛行機だ。そら、北の方からも飛んで來る。

三 鐵道信號、これには常置信號と手相圖てあひづと列車信號とあります。

四 さあ、それはむづかしい事ですね。だが、私もやつて見ませう。

五 夕食後の散歩、僕はこれが大好きです。

六 誇大の言語を弄するは易し。されど、適當の言語を選ぶは難し。(文)

七 自然の意味は、自然のみ之を知る。(文)

- 八 いかにかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。(文)
- B 次の傍線を施した部分は、成分上何に屬するかをいへ。
 - 一 かはゆい子は捧で育てよ。
 - 二 死の門は何人でも之を鎖すことが出来ない。
 - 三 向ふの煙の見えるところ、あれが僕の村です。
 - 四 煙のあるところ、必ず火あり。(文)
 - 五 再び實なる木は、その根必ずいたむ。(文)

第三十六章 文の成分の位置と省略

〔三三〕 一つの文の中の種々の成分の並べ方には、一定の順序がある。

花^主が散^述つた。
山^主高く、谷^主深し。(文)

右のやうに、主語は初に、述語は終に来るのが普通である。

強い雨^主がしきりに降^述る。

私は母^主に笑^述はれた。

萬歳の聲^主 天地をゆ^述るがす。(文)

太郎は美^主しき繪^主を描^述きたり。(文)

右のやうに、修飾語は修飾せられる語の前に來るのが普通である。

私は兄^主から辭書^主をもら^述つた。

彼はきつと大政治家^主にな^述らう。

頼朝 範頼^主をして平氏^主を討^述たしむ。(文)

昨日の烈^主しき雨^主は、各地^主に少^述からざる損害^主を

與^述へたり。(文)

右のやうに、同じ語に對して二つ以上の修飾語がある場合に、

どれが前に来るかは定まりがない。

おや、これは何だらう。

諸君、之を見給へ。

熟慮斷行、これ彼の生涯のモットーなりき。(文)

されば、われ等も之を守らざるべからず。(文)

右のやうに、獨立語は、文の最初に來るのが普通である。

〔三三〕

居る居る 蟲が。

連用修

主

述

あれは 弟も

主

知つてゐる。

連用修

主

連用修

述

どこで 君は

主

それを

見つけたのか。

連用修

主

連用修

述

はら〜と 花は

主

散りけり。(文)

右のやうに、語勢を強め又は語調を整へる爲に、成分の普通的位置を變へることがある。之を倒置といふ。

〔三四〕

前後の關係や、その場の事情で、容易に補ふ事が出来る文

倒置

省略

の成分は、之を言ひ表はさないことがある。之を省略といふ。

あ(花が)咲いたね。

あなたは(それを)知りませんか。

さあ、出かけよう。君は(どうだ)。

(汝は)直ちに出發せよ。(文)

千里の路も一步より(始まる)。(文)

練習題 三八

次の文に成分の倒置又は省略があつたら指摘せよ。

- 一 おお、鳩ぼつぼが歌へるんですね。えらい〜。
- 二 節儉は諸徳の母。
- 三 瓜の蔓に茄子はならぬ。
- 四 その話は僕も聞いてゐる。
- 五 道路の左側を通行すべし。(文)

- 六 東京は昔江戸といへり。(文)
- 七 屋外は風雨の聲もの凄し。滴聲相應す。午後犬を伴なうて散歩す。林に入りて黙坐す。水、林より出でて林に入る。落葉を浮べて流る。(文)
- 八 謂ふなかれ、今日學ばずして來日ありと。(文)
- 九 熊谷の後より武者こそ二騎つゝいたれ。熊谷、誰そと問へば、「季重」と答ふ。「問ふは誰そ。」「直實ぞかし。」「いかに熊谷殿はいつよりぞ。」「宵より」とこそ答へけれ。(文)

第三十七章 文の構造と節

〔三四〕 文の成分は、主語、述語、修飾語及び獨立語である。文はこれ等の成分が結合して出来るものであるが、普通、主語、述語が中心となり、或場合には之に獨立語が加はり、又これ等の成分

に一つ又は多くの修飾語が附いて、複雑な形となるのである。

非常修(一)に 大きな修(二) 船が主 遙か修(三) 向ふの修(一) 島影に 浮ん修(一) だ修(一)てゐる。
 熱烈なる修(一) 愛國心、これこそ主 わが修(三) 國家を 支ふる修(一)
 柱石なれ。(文)

かやうに、主語、述語は文の成立には甚大切なものであるが、前後の關係又はその場合の事情で明かにわかる時は、之を省略して云ひ表はさないことがある。その場合にも之を一つの文と見る。

行け。 殿とはいづこに。(文)

〔三五〕 主語、述語又は獨立語と、之に直接間接に附いた成分とを合せて、主部、述部及び獨立部と名づける。さすれば、文は主語又は主部——述語又は述部

主部
 述部
 獨立部

又は、之に獨立語又は獨立部の附いたものから成り立つのが常である。

非常に大きな船が 遙か向ふの島影に浮んでゐる。

主部

獨立部

主語

述部

熱烈なる愛國心 此れこそ わが國家を支ふる柱石なれ。(文)

〔三六〕

(甲) 鳥が鳴く。

(乙) 鳥の鳴くのが聞える。

右の(甲)の例は、主語と述語とがあつて纏まつた思想を表はす完全な文である。然るに、それが(乙)のやうに用ひられると、他の文の一部分となる。かやうに主語述語を具へた一つの文と同等なものが、或文の一部分になつたものを節といふ。

〔三七〕

電燈の暗いのがいけないのだ。

主語節

香のすぐれたるは梅花なり。(文)
これらの節は、文の主語に用ひられてゐる。かやうな節を主語節といふ。

〔三八〕

日本人は毛が黒い。

日本外史は頼山陽の著せるなり。(文)

これらの節は、文の述語に用ひられてゐる。之を述語節といふ。

述語節

〔三九〕

水のきれいな池がある。

我等は老杉の並立する參道に達せり。(文)

これらの節は、連體修飾語に用ひられてゐる。之を連體修飾節といふ。

連體修飾節

〔四〇〕

先生は言葉やさしく諭しました。

我が艦隊は威風堂々と入港せり。(文)

連用修飾節

私は授業の終るのを待つてゐた。
 落花は蝶の舞ふに似たり。(文)
 日光が強いので葉がしをれた。
 春來れども寒さ未だ去らず。(文)

これらの節は、連用修飾語に用ひられてゐる。之を連用修飾節といふ。

〔三〕

大地震のあつたのは、あれは大正十二年です。
 同じ枝をわきて木の葉のうつろふは、西こそ秋の初なりけれ。(文)

獨立節

これらの節は、獨立語に用ひられてゐる。之を獨立節といふ。
 以上の主語節、述語節、連體修飾節、連用修飾節及び獨立節は、一つの文の成分をなすものである。このやうな節を從屬節といふ。

從屬節

〔三〕

梅も咲き、鶯も鳴く。
 山高く、水清し。(文)

右の文に於て、傍線を附けた部分は、何れも節であるが、その節は文の或成分になつてゐるのではなく、互に對等の資格で結合して、一つの文を組立ててゐる。かやうな節を對立節といふ。

對立節

〔三〕

對立節の中、最後にあるもの以外の節は、いつも下の節に連續するものである。かやうな節は、その述語の部分が特別の形となる。

兄が出征して、弟がうちにゐる。
 病は口より入り、禍は口より出づ。(文)
 山も高いし、谷も深い。
 松青く、砂白くして、水また清し。(文)

色がきれいで、香もよい。

國平かに(して)、民安し。(文)

兄は軍人で、弟は音楽家だ。

兄は軍人にて(にして)、弟は音楽家なり。(文)

○右のやうな節の述語が動詞又は形容詞である時連用形をそのまま用ひる事がある。連用形がかやうに用ひられたのを中止法といふ事がある。

練習題 三九

A 次の文を主部述部獨立部(又は主語述語獨立語)に分けよ。

- 一 あの建物は僕等の學校です。
- 二 例の本ね、あれは大變面白いですよ。
- 三 あんなに榮華を極めた平家も、やはり没落の運命を免れ得なかつた。
- 四 東西に對立する東京と大阪、これが我が國の二大都市である。
- 五 利根氣根黄金の三こんは、事を成すに缺くべからず。(文)

六 われは十一歳の秋より繪畫を習へり。(文)

七 衆人の前にて我が主を辱しめたる者は何人ぞ。(文)

八 薄き濃き山の紅葉はさながら錦を織れるが如し。(文)

B 次の各例は文と見るべきか否かを述べよ。

- 一 うまくやつたな。
- 二 こら、誰だ。
- 三 おおい、騒がしいぞ。
- 四 「その返答は。」「さあ。」
- 五 義經、さては案内よく知つたるらん。老翁、いかでか存知仕らでは候ふべき。義經、さぞあるらん。(文)

C 次の文の傍線を施した節の種類を問ふ。

- 一 ナポレオンの率ある五十萬の大軍がモスコーに着いた時は、十五萬に減つてゐました。住民は姿を隠したので天國のやうに美しい町家は、まるで廢墟でした。やがて夜が更ける

と、町の一角から火が起りましたが消さうとする者は一人も居りません。焔の燃え立つ音と家の倒れる音とを聞きながら、飢ゑた兵卒と乞食とは、市民の置き去つた物品を掠めて、先づ腹のふくれるまで飲み食ひするのでした。

二 この歌は紀貫之の詠めるなり。(文)

三 彼の幼時苦學せるは、人多く之を知らず。(文)

四 霜は木々の梢を色美しく染め出せり。(文)

五 花笑ひ鳥歌ひ、天長閑に霞み、水緩やかに流るゝ、春の日に當りても、快き事のみ懷に満つべくはあらず。(文)

D 次の文に、いかなる節があるかを示せ。

一 あの男は意志が強い。

二 雨が降るのに、傘も持たずに出かけた。

三 サイレンが鳴つたら、直ぐ始めよう。

四 僕はこの本のむづかしいのに閉口した。

文の構造上の分類

第三十八章 文の種類

〔三〕 文は構造上から分類すると、次の三種となる。

單文 複文 重文

〔三〕 春が 來た。

五 會の終つたのは六時頃でした。

六 君の賛成してくれるのは、それは有難い。

七 成敗は當時の勢によりて分れ、是非は後人の論によりて定まる。(文)

八 我、他に對して同情を缺かば、他人もまた白眼を以て我を視るべし。(文)

九 西風冷かにして、慘たる鳥聲秋の恨を語る。(文)

一〇 意志の強きものは、世界をして自己を摸せしむ。(文)

單文

若き日は 再び來らず。(文)
右の諸例のやうに主語述語の關係が一回しか成立せぬ文を單文といふ。

梅も櫻も美しい。

あ、見えた、尾が、足が、頭が。

われ／＼は疲れると休憩し、眠くなると寝た。

彼は詩を作り、又畫に巧みなり。(文)

右のやうに、主語又は述語が多くあつても、主語述語の關係が一回しか成立せぬものは單文である。單文には節を含まない。

〔三七〕

意志の強いのが結局成功する。

家康の成功したのも、忍耐力が強かつたからだ。

この器は亡父の愛玩せる遺品なり。(文)

複文

右の例のやうに、文の成分に節がある文を複文といふ。複文は從屬節を有する文である。随つて、主語述語の關係が二回以上成立つ。

〔三七〕

品がよくて、値段もやすい。

サイレンも鳴り、汽笛の音も聞える。

親は子を愛し、子は親を敬ふ。(文)

部下多く戦死し、食料乏しく、彈丸もまた盡きんとす。

(文)

重文
文の性質上の分類

右の例のやうに、對立節から成立つてゐる文を重文といふ。随つて、重文では主語述語の關係が二回以上成立つ。
〔三八〕 文をその性質上から分類すると次の四種となる。

平敘文 疑問文 命令文 感動文

〔三九〕 雨が降り出した。

授業はまだ終らない。

今日は本校の創立記念日なり。(文)

会場は定めし美しからん。(文)

右の例のやうに、斷定肯定否定や推量の意味を述べるだけの文を平敘文といふ。

〔四〇〕 それは鉛筆ですか。

今頃誰が来るものか。

汝之を我に語りしにあらずや。(文)

右の例のやうに、疑問の意又は反語の意を表はす文を疑問文といふ。

〔四一〕 そこにお立ちなさい。

疑問文

平敘文

命令文

感動文

係結

決して油斷するな。

悪を友とするなかれ。善を友とせよ。(文)

いたくな歎き給ひそ。(文)

右の例のやうに、命令禁止の意を表はす文を命令文といふ。

〔四二〕 おもしろい人だな。

まあ、お立派なお庭ですこと。

はかなき人生よ。(文)

さても頼みがたき人の心かな。(文)

右の例のやうに、感動の意を表はす文を感動文といふ。

〔四三〕 文語では、平敘文疑問文に於て、文を終止する用言又は活用連語が、助詞「ぞ」「なむ(なん)」「や」「か」を受ける時は、終止形の代りに連體形を用ひ、「こそ」を受ける時は已然形を用ひる。之を係結かひやくの法則といふ。

緑なる一つ草とぞ春は見し。秋はいろくの花にぞありける。

それになむ定むべき。

煙たなびく苦屋こそわが懐しき住家なれ。

月や出でたる。

汝何をか欲する。

○副詞「かが」を受けた活用語も、連體形で終止する。

こは、い。かがす。べき。

練習題

四〇

A 次の文は、構造上如何なる種類に屬するかを述べ、また節を含むものは、その節の種類を述べよ。

- 一 或夏の半ば宣長はかねて買ひつけの古本屋に行つた。
- 二 かやうに牛が多く飼はれるのには、理由があります。

- 三 鯉は黒潮の流れてゐる暖い海の表面近くに棲んでゐます。
- 四 石炭の火は、木炭の火よりもずつと熱度が高い。
- 五 年少者は希望に生き、老人は追憶に生きる。
- 六 上海は、商業の都市として知られてゐる。
- 七 汽車は密林の間を通り抜けて、やがてトンネルに入つた。
- 八 十勝の平野は、心ゆくばかり晴々しい處である。
- 九 能ある鷹は爪を隠す。
- 一〇 内海の沿岸には景勝の地少からず。(文)
- 一一 年々花は變らねども、歳々人同じからず。(文)
- 一二 清正と正國とは、組みつほぐれつ互に争へり。(文)
- 一三 ねぢ伏せられながら、正國、清正が鎧の裾をしつかとつかむ。(文)
- 一四 昔より賢き人の富めるは稀なり。(文)
- 一五 風凧、日和らぎ、何處ともなく春意動きて、早咲きの梅五六輪村落の籬に香る。(文)

B 次の文は性質上、どの種類に属するかをいへ。又、係結の法則の行はれてゐるものがあつたら、之を指摘せよ。

一 「私は雪で困つてゐる旅の者でございます。一晚泊めていただけませんか。」「まあ、それはお困りでございませうね。が、只今主人が居りませんので、お泊め致す事は出来ません。これから少しお出でになりますと、宿屋がございませう。日の暮れぬうち、早くお出でなさいませ。」

二 「やあ助かつてよかつたね。だが、あの熊が君の耳に口をつけて、何かさゝやいてゐたやうだね。何と云つたの。」「うん、熊か。『危険の迫つた時に、友達を見捨てるやうな者とは、一緒に旅をするな。』と教へてくれたんだ。」

三 「さてその文は、いづくよりいづちへ参らせらるゝぞ。」「これは京より、女房の、八島の大蔵殿へ参らせられ候。源氏既に淀川尻に出で浮んで候へば、定めてそれをこそ告げ申され候ふら

め。」「げにさぞあるらむ。者ども、その文奪へ。しやつ搦めよ。罪つくり顛な切りそ。」(文)

四 「鹿の通はんずる所を、馬の通はざるべきやうやある。汝案内せよ。」「この身は年老いて、いかにもかなひ候ふまじ。」「さて汝に子はなきか。」「さぶらふ。」(文)

五 「味方にあの扇の射るべき者やある。」「那須與一宗高こそ小兵にて候へども、手ききにて候へ。」「證據はいかに。」「翔鳥かげどりなどを争うて、三つに二つは必ず射落す者にて候。」「さらば、與一召せ。」(文)

C 次の文語文に誤があつたら正し、その理由を説明せよ。

- 一 我こそ御行方知り参らせたりと申す者一人もなかりき。
- 二 生を此の國に享けたるぞこよなき幸福なりと、古人もいはれたる。
- 三 兵の「こゝにこそ」と言はんずる一言をなむ待たせ給ひけり。

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	ワ
行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行
ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	セ
キ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ	ス
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	ウ
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	ス
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ	ス
バ	バ	ダ	ザ	ガ						
行	行	行	行	行						
バ	バ	ダ	ザ	ガ						
ビ	ビ	ヂ	ジ	ギ						
ブ	ブ	ヅ	ズ	グ						
ペ	ペ	デ	ゼ	ゲ						
ポ	ポ	ド	ゾ	ゴ						

- 四 武士の戦場の露と消ゆるは、古今珍しくも候はぬ。
- 五 歩み疲れて松蔭に臥させ給ふぞ痛ましけれ。
- 六 いかでかゝる事あるべき。死なば一所にこそともかくもならん。
- 七 「君の爲に命を捨つるはこの時にこそ」と思ひ定めたれ。
- 八 皇軍の辛苦さこそと思ひやらるゝ。
- 九 皆之を喜びけりとなむ聞えし。
- 一〇 君國の爲にこそ死すべきなり。

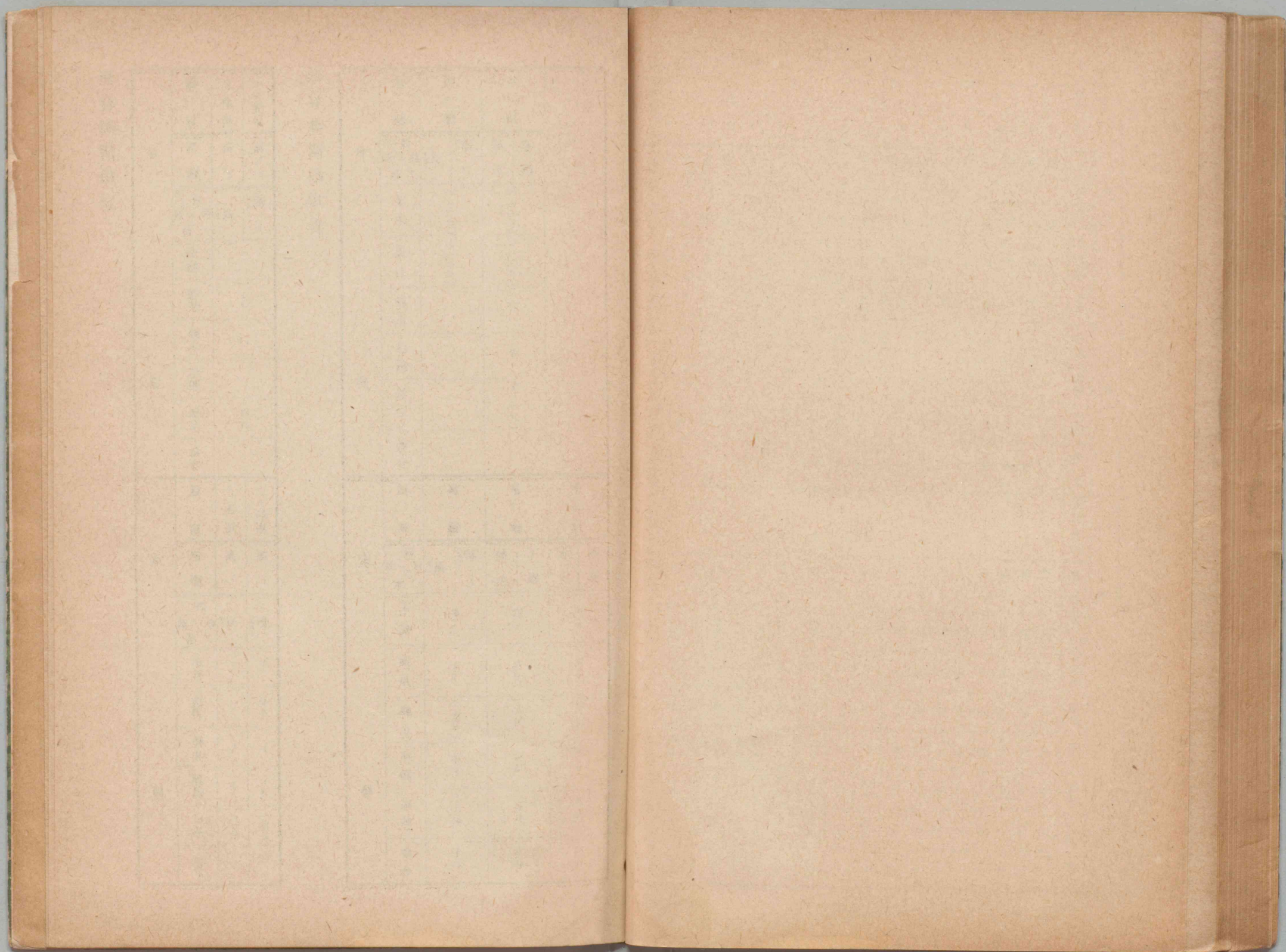
〔第一表〕
五十音圖

(ヤ) (マ) (ハ) (ナ) (タ) (サ) (カ) (ア) 行 行 行 行 行 行 行 行	(ワ) (ラ) (ヤ) (マ) (ハ) (ナ) (タ) (サ) (カ) (ア) 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行	
ヤ マ ハ ナ タ サ カ ア	わ ら や ま は な た さ か あ	ア段
イ ミ ヒ ニ チ シ キ イ	ゐ り い み ひ に ち し き い	イ段
ユ ム フ ス ツ ス ク ウ	う る ゆ む ふ ぬ つ す く う	ウ段
エ メ ヘ ネ テ セ ケ エ	ゑ れ え め へ ね て せ け え	エ段
ヨ モ ホ ノ ト ソ コ オ	を ろ よ も ほ の と そ こ お	オ段
(バ) (バ) (ダ) (ザ) (ガ) 行 行 行 行 行	(バ) (バ) (ダ) (ザ) (ガ) 行 行 行 行 行	
バ バ ダ ザ ガ	ば ば だ ざ が	ア段
ビ ビ チ ジ キ	び び ち じ き	イ段
ブ ブ ツ ズ グ	ぶ ぶ づ ず ぐ	ウ段
ベ ベ デ ゼ ゲ	べ べ で ぜ げ	エ段
ボ ボ ド ゾ ゴ	ぼ ぼ ど ぞ ごと	オ段

一〇 君國の爲にこそ死すべきなり。

動詞活用表

サカ	カ	段 一 下										段 一 上										段 四				種類																			
		ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ		ガ	カ	ラ	マ	バ	ハ	ナ	タ	サ	ガ	カ								
爲	來	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	居	懲	悔	射	試	見	延	強	干	煮	恥	落	案	過	生	着	蹴	有	乘	踏	飛	間	死	打	害	貨	騒	開	口	
爲	來	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	居	懲	悔	射	試	見	延	強	干	煮	恥	落	案	過	生	着	蹴	有	乘	踏	飛	間	死	打	害	貨	騒	開	語	
せ	し	え	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	み	り	い	み	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	き	ら	ら	ま	ば	は	な	た	さ	さ	が	か	未然			
し	き	え	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	み	り	い	み	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	き	り	り	り	み	び	ひ	に	ち	し	し	ぎ	き	連用		
す	く	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	み	り	い	み	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	き	る	る	る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ	す	す	ぐ	く	終止		
す	く	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	み	り	い	み	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	き	る	る	る	む	ぶ	ふ	ぬ	つ	す	す	ぐ	く	連體		
す	れ	え	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	み	り	い	み	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	き	れ	れ	れ	め	べ	へ	ね	て	せ	せ	げ	け	假定		
せ	し	え	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	み	り	い	み	み	び	ひ	ひ	に	ち	ち	じ	ぎ	き	き	れ	れ	れ	め	べ	へ	ね	て	せ	せ	げ	け	命令		
サカ	カ	段 二 下										段 二 上					段 一 上		段 四		種類																								
變	變	ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	ラ	ヤ	マ	バ	ハ		ダ	タ	ガ	カ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	カ	カ	變	變	ラ	マ	バ	ハ	タ	サ	ガ	カ			
爲	來	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	懲	悔	恨	延	強	恥	落	過	生	居	射	見	干	煮	着	蹴	有	死	乘	踏	飛	間	打	貨	騒	開	文			
爲	來	植	流	越	染	述	教	連	出	捨	交	失	投	受	得	懲	悔	恨	延	強	恥	落	過	生	居	射	見	干	煮	着	蹴	有	死	乘	踏	飛	間	打	貨	騒	開	語			
せ	し	え	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	み	い	み	ひ	に	き	け	ら	な	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か	未然			
し	き	え	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	み	い	み	ひ	に	き	け	り	に	り	み	び	ひ	ち	し	ぎ	き	連用			
す	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	づ	ぐ	く	る	い	る	み	ひ	に	き	る	り	ぬ	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	終止	
す	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	づ	ぐ	く	る	い	る	み	ひ	に	き	る	る	ぬ	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	連體	
す	れ	う	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	う	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	づ	ぐ	く	る	い	れ	み	れ	れ	に	き	れ	れ	ぬ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	已然
せ	し	え	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	る	い	み	ひ	に	き	け	れ	ぬ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	命令			



比況	定指	讓	敬	望希	量	推	丁
	です だ	ます	られる れる	たがる たい	まい	よう う	らしい
	でせ だら	ませ	られ れ	たがら			
	でし だつ	まし	られ れ	たがり たく			らしく
	です だ	ます (まする)	られる れる	たがる たい	まい	よう う	らしい
	(な)	ます (まする)	られる れる	たがる たい	(まい)	(よう) (う)	らしい
	なら	ます れ	られ れ	たがれ たけれ			
		まし (ませ)					
	形容詞の終止	連用	受身のレル、 ラレルに同じ	連用	未終止(四段) 未終止(右以外)	未終止(四段) 未終止(右以外)	終止 體言、助詞
ごとし	たり なり	しむ さす	らる る	まほし たし	まじ べし	む らむ	り
ごとく	たら なら	しめ させ	られ れ	まほしく たく	まじく べく	む らむ	(ら)
ごとく	たり なり	しめ させ	られ れ	まほしく たく	まじく べく		(り)
ごとし	たり なり	(しむ) (さす)	らる る	まほし たし	まじ べし	む らむ	り
ごとき	たる なる	(しむる) (さする)	らる る	まほしき たき	まじき べき	む らむ	る
	たれ なれ	(しむれ) (すれ)	られ れ	まほしけれ たけれ	まじけれ べけれ	め らめ	(れ)
	たれ なれ		られよ れよ				(れ)
はガノ	用言の連體又	連體	受身、使役の 助動詞に同じ	連用	未終止 終止 終止	未終止 終止 終止	終止 連體

〔第四表〕

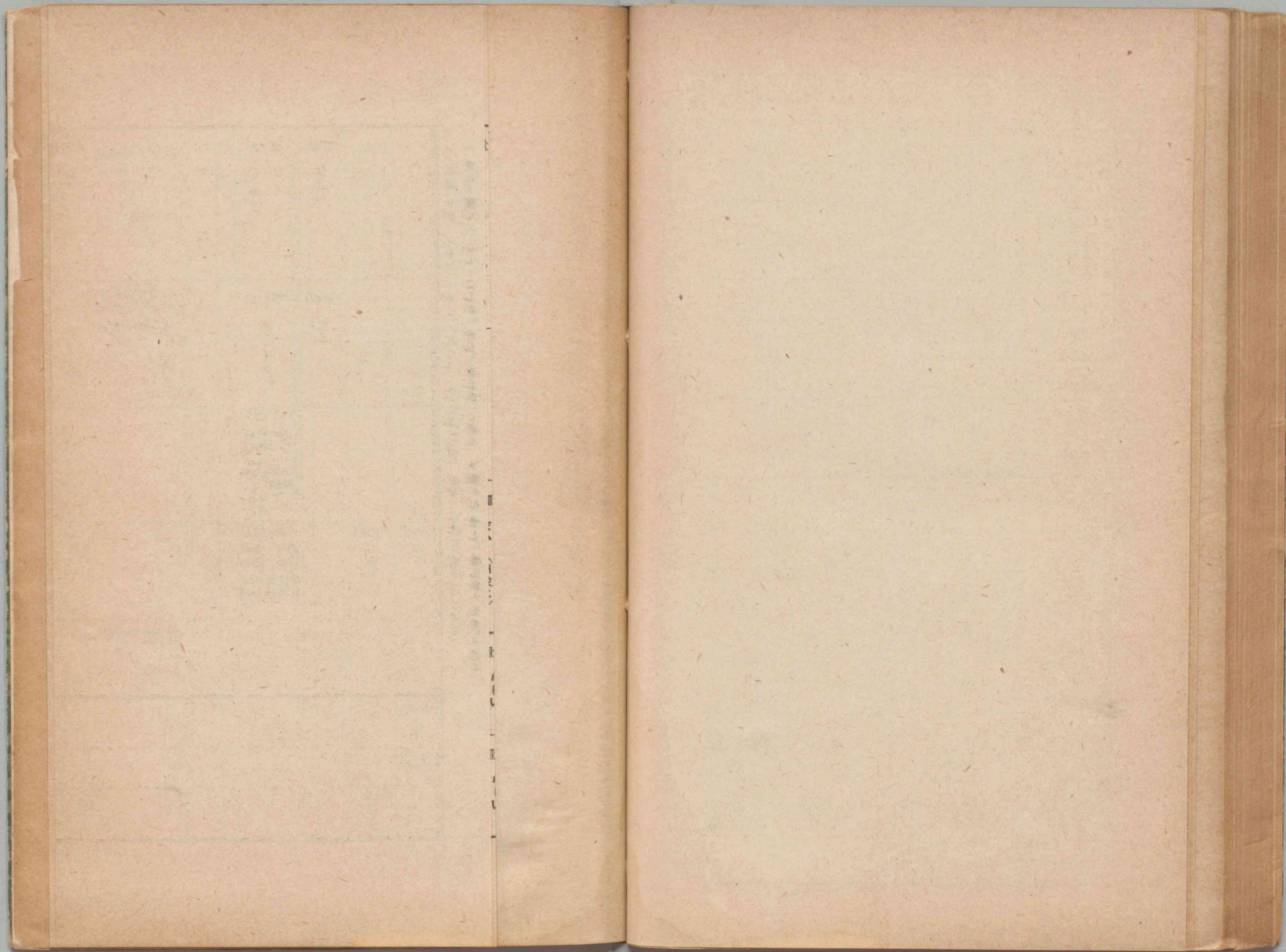
助動詞活用表

敬		望希		量推		了完び及去過		消打		役使		能可		身受		種類	
られる	れる	たがる	たい	まい	よう	う	らしい	た	ぬ	ない	させる	せる	られる	れる	られる	れる	口語
られ	れ	たがら						たら			させ	せ	られ	れ	られ	れ	未然
られ	れ	たがり	たく						ず	なく	させ	せ	られ	れ	られ	れ	連用
られる	れる	たがる	たい	まい	よう	う	らしい	た	ぬ(ん)	ない	させる	せる	られる	れる	られる	れる	終止
られる	れる	たがる	たい	(まい)	(よう)	(う)	らしい	た	ぬ(ん)	ない	させる	せる	られる	れる	られる	れる	連體
られ	れ	たがれ	たけれ					たら	ね	なけれ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	假定
											させ	せよ			られよ	れよ	命令
ラレルに同じ	受身のレル	連用	連用	終止(四段) 未然(右以外)	終止(四段) 未然(右以外)	終止(四段) 未然(右以外)	終止(四段) 未然(右以外)	連用	未然	未然	未然(四段) 終止(右以外)	未然(四段) 終止(右以外)	ラレルに同じ	受身のレル	未然(四段) 終止(右以外)	未然(四段) 終止(右以外)	接續
る	る	まほし	たし	まじ	べし	けむけん	む(ん)	〔了完〕 りつぬ	ざり	ず	しむ	ます	する	る	る	る	口語
られ	れ	まほしく	たく	まじく	べく	けむけん	む(ん)	(ら)たらてな	ざら	ず	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	未然
られ	れ	まほしく	たく	まじく	べく	けむけん	む(ん)	(り)たりてに	ざり	ず	しめ	させ	せ	られ	れ	られ	連用
る	る	まほし	たし	まじ	べし	けむけん	む(ん)	りたりつぬ	(ざり)	ず	しむ	ます	する	る	る	る	終止
る	る	まほしき	たき	(まじ)	べき	けむけん	む(ん)	るたるつるぬ	ざる	ぬ	しむる	さする	する	る	る	る	連體
る	る	まほしけれ	たけれ	(まじ)	べけれ	けむけん	む(ん)	(れ)たれつれぬれ	され	ね	しむれ	さすれ	すれ	る	る	る	已然
られよ	れよ							(れ)たれつれぬれ	ざれ		しめよ	させよ	せよ			られよ	命令
受身のレル	連用	連用	連用	終止(四段) 連體	終止(四段) 連體	終止(四段) 連體	終止(四段) 連體	連用	未然	未然	未然(四段) 終止(右以外)	未然(四段) 終止(右以外)	ラレルに同じ	受身のレル	未然(四段) 終止(右以外)	未然(四段) 終止(右以外)	接續

〔第四表〕

助動詞活用表

比況	定指	讓	敬	望希	推量		了完び及去過		消打	役使	能可	身受	種類	口
					まい	よう	た	ぬ						
です	だ	ます	られる	たい	まい	よう	た	ぬ	させる	せる	られる	られる	語	
でせ	だら	ませ	られ	たがら			たら		させ	せ	られ	られ	未然	
でし	だつ	まし	られ	たく				ず	させ	せ	られ	られ	連用	
です	だ	ます	られる	たい	まい	よう	た	ぬ	させる	せる	られる	られる	終止	
(な)		ます	られる	たい	(まい)	(よう)	た	ぬ	させる	せる	られる	られる	連體	
なら		ますれ	られ	たけれ			たら	ね	させ	せ	られ	られ	假定	
		ませ							させ	せよ	られ	られ	命令	
形容詞の終止	體言、助詞ノ	連用	受身のレル、ラレルに同じ	連用	終止(四段) 未然(右以外)	終止(四段) 未然(右以外)	連用	未然	未然	未然(四段) 未然(右以外)	受身のレル、ラレルに同じ	未然(四段) 未然(右以外)	接續	
ごとし	たり	なり	しむ	さす	す	らる	まほし	たし	む	ら	らる	らる	語	
ごとき	たら	なら	しめ	させ	せ	られ	まほしく	たく	む	ら	られ	られ	未然	
ごとき	たり	なり	しめ	させ	せ	られ	まほしく	たく	む	ら	られ	られ	連用	
ごとし	たり	なり	(しむ)	(さす)	(す)	らる	まほし	たし	む	ら	らる	らる	終止	
ごとき	たる	なる	(しむる)	(さする)	(する)	らるる	まほしき	たき	む	ら	らるる	らるる	連體	
	たれ	なれ	(しむれ)	(さすれ)	(すれ)	られ	まほしけれ	たけれ	む	ら	られ	られ	已然	
	たれ	なれ				られよ						られよ	命令	
はガノ	體言	連體	受身、使役の助動詞に同じ	連用	未然	終止(ラ變體)	連用	連用	連用	連用	未然	未然	接續	



〔第五表〕

口語助動詞接續表

動詞以外に		動詞		動詞以外に	
終止形に		連用形に		終止形に	
(身受)	れる られる (四段以外に)				
(能可)	れる られる (四段以外に)				
(役使)	せる させる (四段以外に)				
(消打)	ぬ ない (サ變は「し」に) ぬ(ん) (サ變は「せ」に)				
		(及去過) 了完び た (サ行以外 の四段は 音便形に)			
(量推)	う (四段に) よう (四段以外に) まい (四段以外に) (サ變は「し」に)			(量推) らしい まい (四段に)	
				(量推) らしい	
(讓敬)	れる られる (四段以外に)	(讓敬) ます		(定指) てす	
		(望希) たい たがる		(定指) てす だ	
					(量推) らしい

○指定の「だらう」「なら」「てせ」「う」は動詞の終止形に連る。

文語助動詞接續表

文語助詞接續表

		(第一種) がのきにへとよりにて	體 言 に
ばや なそ(カ變サ變に)	ば (第二種)		未 然 形 に 用
なそ(カ變サ變以外に)	つ ながら とも(形容詞)	(第二種) て(音便形にも)	連 用 形 に
や な(ラ變以外に)	とも(動詞に)	(第二種)	終 止 形 に 言
よぞかな(カ變に)	がに (第二種)	(第一種) がのきにへとよりにて	連 體 形 に
	ども どば (第二種)		已 然 形 に

三東
遠藤昌

市南三東十番
遠藤昌

